ふかんど

第121号
1981.11.15
谷津干潟愛護研究会
〒272 市川市本北方二〜三五〜六
電話〇四七三ー三六ー六六六八
文責 森田三郎
会費年2000
創刊 1980.6.3

〈小学生の頃、漁師まちを新聞配達をしていた。ベカ舟のゆき交う八千代橋の上で、ヤキイモを食べながら、母を待つのであった。〉

あなたの行動は.心から尊敬
しています.それだけに.
他会を非難したり.自分
だけが.と強調する記事（ふかんど）
は.あなたの清純さが.
誤解されます.少し自重して下さい!!

P.S.

→それにこんなに毎日では.
読んでいけません!

私も谷津は.だぁ〜いすき
なのです.

（手紙は匿名さまでした）

他のところは、今しばらく考えさせて下さい。↓印のところだけ、少し言いわけをさせて下さい。他の人もそう思っていると考えられるし、私も覚悟はしていました。

右の手紙にあるような思いを、誰もが持つことを十分知ってて、そーして敢行してきました。

今、私は引越しのさ中です。仕事をしていません。先にも書いた如く、七月の末に十四年間働いていた新聞店をやめました。殆んど、事実は「クビ」です。谷津干潟のことをやりすぎたのが、結果的にはこういうことになったのです。七年間、干潟のことをやってきました。時間が欲しかったので、私は最低限の仕事しかしてきませんでした。いつも、いつも他の人の私に対する不満がありました。私もそれを知っていたし、彼ら（仕事仲間）の方が理がかなっていることも、理解していました。ふつうの人は、朝刊が終ると寝ます。でも私は寝ません。干潟や埋め立て地に行っては、いろいろなことをやり、夕刊までに帰っていくのでした。疲れるので、それが仕事にも出てしまいました。朝起きられないといけないので、店の中の板の間や車の中に毛布や寝袋をかつぎ込んで、長い間寝ていました。苦情も来ました。それでもやりました。セイタカシギの時などは、何ケ月もそういう寝方をして、ぼくなりに一日一日と積み重ねていきました。店の中にあって、私の置かれている位置、していることも、全部知っていました。そーしていつか、こうなると知っていました。そーして、そうなりました。

とく名で、どなたか知りませんが、今、この時、時間がある時に、いままでやろうと思っていたことを、私にさせて下さい。生活に不安もあります。貯金をおろして、今をおいてない、とばかりに、半ばあせって会報をつくりました。こんなに出せば経済も苦しいです。

・読んでいけません、というのはわかります。

・でも、森田は、それでも出したく思いました。干潟の問題が解決して、一日も早く「干潟の想い出」に着手したいと切に思っています。

お振込は千葉銀行012−54253
谷津干潟愛護研究会

私が、アメリカインディアンに関心を持ったのは、今から約二十年と前のことである。E・T・シートンの自叙伝が、そのきっかけである。

その頃私は、日立の技能者養成所の生徒だった。三年間勉強しながら、そして給料をくれるのである。学校に来た案内には、定時制に通学可とあったが、入所したら、社則で禁止とのことだった。この養成所も中々むずかしくて、かなり頭の良い人間が集ってた。確か、倍リツがその当時で五倍ほどあった。

日立・亀戸工場であった。船橋の宮本町からみると、空気はくさいし、緑が少なく、コンクリートだらけなのには全く閉口した。工場の中にある、大きさ一米ぐらいの池が、私にとって唯一の「いこいの場」であった。今の谷津ハイツの所でとった魚や水草を、満員電車の中へ持ち込み、池へ入れていつも見ていた。

文化

燎原の火 レッド・パワー

アメリカ史とインディアン

猿谷　要

昨年の秋、短い三カ月間のアメリカの旅から帰ったとき、私の心のなかに、アメリカにはいま何かが起りはじめている、という確かな手ごたえが生まれていた。そのなかのもっとも重要なものの一つが、レッド・パワー、すなわちインディアン精神の復興である。

白人との紛争続発

もっともここ三、四年、すでにいろいろな事件が続発していた。サンフランシスコ湾のアルカトラズ島を一年半も占拠していたり、十一月の感謝祭にはプリマスにある実物大のメイフラワー号によじ登り、当時のイギリス国旗をひき下ろしたり、北部太平洋岸では川をさかのぼる鮭（さけ）の漁獲権をめぐって白人との間に紛争が起ったり、その他日本に報道されない細かな事件を含めると、日を追ってその波は増加している。

私が帰国してからも、全国的な通信網を通したインディアンたちが、大統領選挙の直前に悪名高い内務省インディアン局を一週間ほど占拠した。そして今度、インディアンにとっては忘れられない土地、サウス・ダコタ州のウーンデッド・ニーの丘の上の教会にたてこもったのだ。またこれと同時に、ニューメキシコ州ギャラップでは、十九歳のナバホ族の少年が、市長を誘かいしようとして、警官に射殺された。――それはもう、だれにもさえぎることのできない燎（りょう）原の火となったのではないか。

虐殺に議会が勲章

一八九〇年（明治二十三年）、女子供を含むスー族約三五〇人を武装解除して、そのまわりを包囲していた第七騎兵隊は、わずかなトラブルがきっかけでいっせいに発砲し、ホッチキス砲四門も加えた攻撃で、約三〇〇人をまたたくまに殺害した。白人側はこれを「ウーンデッド・ニーの戦闘」とよび、二十六個の議会勲章を与えた。インディアン側ではそのとき殺された酋（しゅう）長の名をとって「ビッグ・フット一行の虐殺」とよんでいる。どちらの方が、より正しく事件の性格を伝える呼び名であろうか。

この事件が象徴的となったのは、これがインディアンと白人の大きな衝突の最後になったからである。規模こそ違うが、ほぼ同様の事件がかつて無数に発生したことを、いま歴史家はほとんど否定することができない。

もちろん今までにも、インディアンに関する文献は決して少なくなかった。歴史学者、人類学者、社会学者、民族学者などの研究は、かなりの数に上っている。しかしそれは、ほとんどみな白人の眼からながめた研究であり、時には学者の業績のためだけの研究であった。標準的なあるアメリカ史は、コロンブスの発見以前に「北米の自然」という項目をのせ、その自然の一部としてインディアンに触れるという程度にすぎなかったのだ。

恥ずかしい話だが、今から十何年か前に書いたアメリカ史のなかで、「一九二四年にすべてのインディアンに市民権が与えられて、問題はほぼ解決した」という意味のことを私は書いた。しかしその当時、これは恥ずかしいというよりも、むしろ一般の常識であった。白人の書いたものだけを無批判にうけいれているとどうなるかという、これはよい実例といえるだろう。

真実追求する動き

ところが、昨年私がアメリカの書店で発見したのは、インディアン関係の本の想像を絶する氾濫（はんらん）だった。白人が書いたものも、インディアン自身が書いたものも、みな真実を追求しようとしていた。そういえば、二、三年前から映画界にもレッド・パワーの影響は現れていた。「ソルジャー・ブルー」「小さな巨人」などだが、日本ではせいぜい新しいタイプの西部劇という程度の紹介にとどまった。次々に出版される本は、いま私の懐で買いきれるような量ではない。

そして数年前、黒人研究の高まりとともにブラック・スタディズの学科が多くの大学で新設されたように、レッド・スタディズ、すなわちインディアン研究のプログラムをとりあげる大学もあらわれている。

守った条約はゼロ

しかしかつてインディアンには、チェロキーの特別な例を除いて文字はなく、言葉も千差万別だったから、総合的なインディアン史が書かれるまでにはかなりの歳月を必要とするだろうが、それを待たないでも、訂正しなければならないことは無数にある。たとえばインディアン一部族をはじめは一国家とみなし、これと条約をかわしてその数は三七一にもなるが、最終的に白人が守ったものは一つもないことを、いまさら否定することはできない。

一七六三年にはイギリスとフランスが、一八〇三年にはアメリカとフランスが、勝手に西部の広大な土地を割譲したり、売買したりしているが、当時そこに住んでいたのはほとんどインディアンであり、いいかえればそれはインディアンの土地であった。西部開拓という表現を私たちは使うが、開拓という言葉はそのままでいいのだろうか。収奪とか侵略とか、少なくとも征服という言葉の方が、実際の性格をより忠実に表現しているのではないだろうか。

西部開拓でなく収奪

今も50万人が居留地に

白人文化に影響

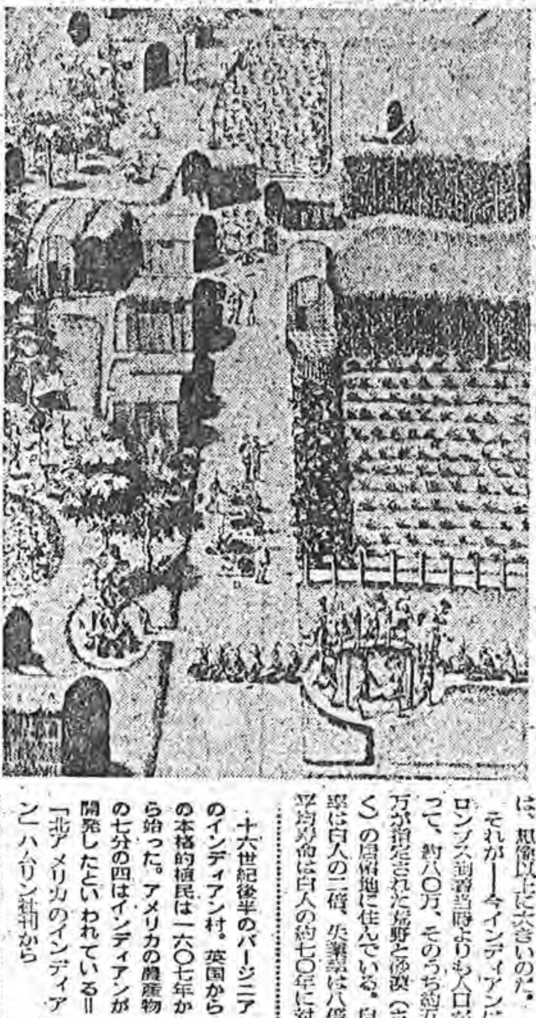
インディアンが白人文化にどんなに深い影響を与えたか、ということは完全に無視されている。ところが現在、アメリカの全農産物の七分の四は、インディアンが開発し、その後教えられて白人が採用したものであり、その他にも、音楽、文学、医薬、民芸、工芸、言語、料理、衣服などアメリカ生活一般に及ぼしている影響は、想像以上に大きいのだ。

それが――今インディアンはコロンブス到着当時よりも人口が減って、約八〇万、そのうち約五〇万が指定された荒野と砂漠（さばく）の居留地に住んでいる。自殺率は白人の二倍、失業率は八倍、平均寿命は白人の約七〇年に対して四七歳、年収は白人の約四〇パーセントで、黒人の平均よりも少ない。

ブラック・パワーという表現にならって、レッド・パワーという言葉が生れたが、彼らの場合、黒人その他のマイノリティと決定的に違う意識がある。いうまでもなくそれは、インディアンこそ、とく最近までアメリカ大陸の主人公だったという事実である。住民の殺戮（さつりく）と土地の収奪の方法があまりにも無法だったので、さすがにインディアンに対しては、良心の苛責（かしゃく）を感じる白人も少なくない。そしていま広がったインディアンの叫びのなかには、西洋文明の価値観を根本から問い直そうという意欲もよみとれるのである。

先日ある人から「インディアンには、人にきらわれるような何かがあるのでしょうか」という質問を受けて、私は立ちすくんだ。平均的日本人のアメリカ理解には、まだどこかに大きな陥穽（かんせい）があるのではないか。

（東京女子大学教授・アメリカ史）



十六世紀後半のバージニアのインディアン村。英国からの本格的植民は一六〇七年から始った。アメリカの農産物の七分の四はインディアンが開発したといわれている＝「北アメリカのインディアン」ハムリン社刊から

50.?月?日（朝日新聞）

昔、空地のあちこちにノリ干場が作られました。そしてそこは、子供産にとって、とても気持の良いひなたぼっこの所でした。

ふかんど

第122号
1981.12.24
谷津干潟愛護研究会
〒272 市川市本北方二ー三五ー六
電話（四七三）ー三六ー六六六八
文責 森田三郎
会費年2000
創刊 1980.6.3

いそしぎにて

谷津干潟の近くにある「いそしぎ」は、この私にとって、オアシスであり、「ベースキャンプ」である。

ここには、四、五名ほどの主婦がパートタイマーできている。皆んな近くに住んでいる人たちばかりである。

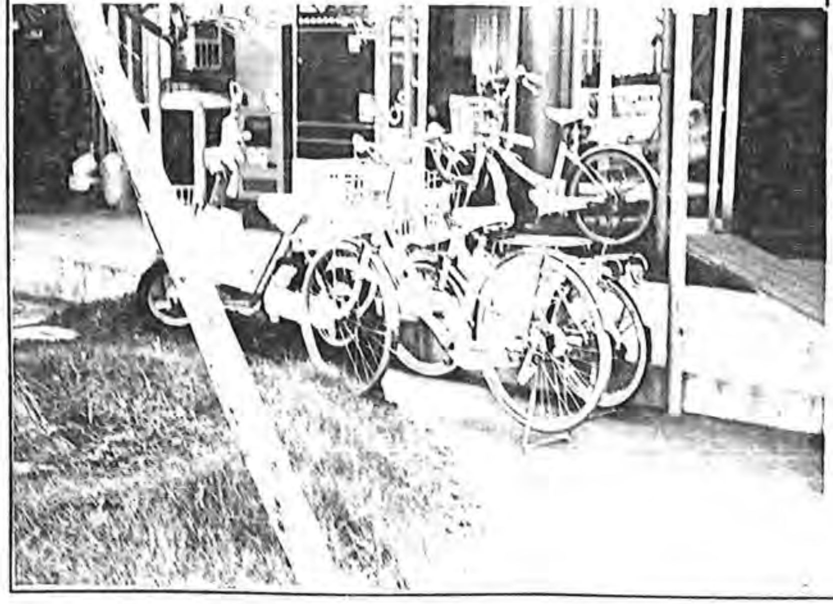
ある日の午後、私はいつものようにコーヒーを飲んでいた。干潟の清掃をして、ひと息ついていた。大きなガラスの窓を通して、何気なく外を見ていた。すると、すぐ前の植え込みの小道を、二人の小学生と思われる子供が目に入った。二人とも、しきりに目をこちらがわ、店の中をのぞくようにして歩きながら、入口の方へ向うのであった。子供同士でこういう所に来るのはめずらしいのである。海へ何かをしに行った恰好ではなく、手には何も持っていない。

何かの目的があってここに来たことは、子供の目や顔つき、体のそぶりからとわかった。いくらか笑いながら、うれしそうに、そして恥しそうに、入口のそばで二人くっついて中を見るのだった。「いるぞ、いるぞ」という、そんな感じの彼らだった。入ってこないが、又、入って来たそうな彼ら。何だろう、と思っていたその時、「あらっ、○○さんの子供よお！」と、店のパートタイマーの一人が言った。子供の態度に、恥しさとうれしさが増したのがわかった。とたんに、主婦の一人が子供の方、入口のそばへ行って、「来すやあだめよお、早く帰えんなあ、仕事をしてるんだからっ」と言った。母親だったのだ。そして彼らはその子供であり、「母ちゃんに会いたくって」来たのだ。

だが私は、そこに、二十五年を前の私を見、懐かしくせつない想い出がこみ上げたのだ。

調理場の中で、日替りメニューの調理している主婦の人。昼の一時が大変なのだ。まるで戦場のような感じである。

皆んな近いので、自転車にのってきて、入口の所にこうしてとめてある。まだまだ交通の便がわるいのである。



お振込は千葉銀行012—54253
谷津干潟愛護研究会

看板コンテスト

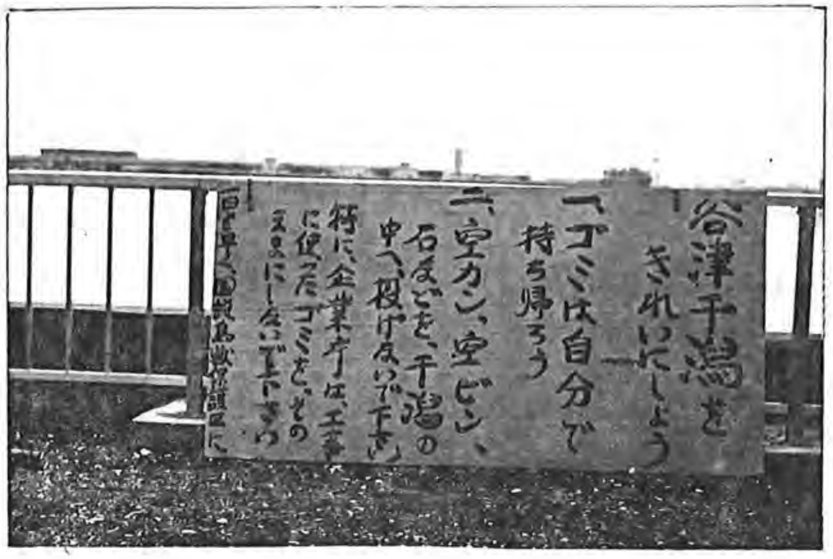
続々と立てられています。まだ〱この調子で、五年十年、そして二十年と続いていくのでしょう。今の谷津干潟は、きれいにすることを訴える為に、これでいいということはありません。

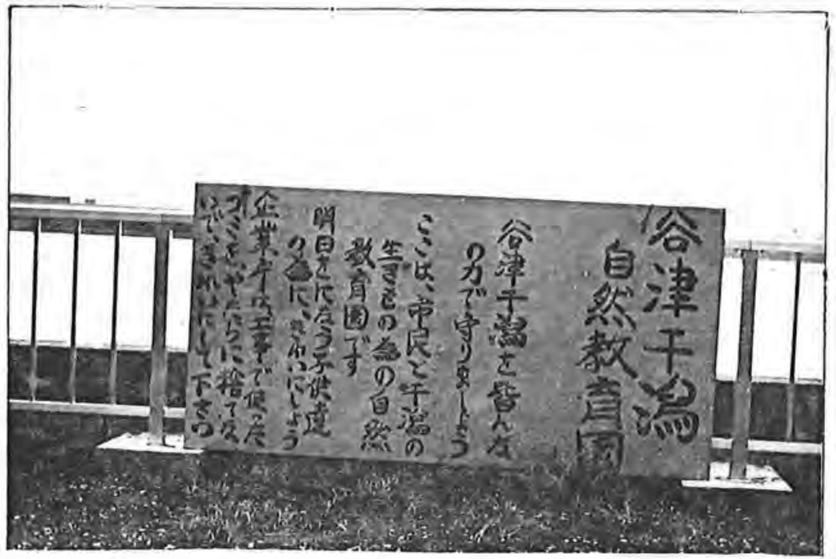
しつこいと言われても、くどいと言われても、私達は訴えることを止めません。

もし、谷津干潟に鳥を見にくる人達が、一人が一つずつゴミを拾ってくれれば、干潟はもっと〱きれいになっていたでしょう。が、それが、そんな簡単なことができないのです。見ていても、ゴミを捨てているのを知っていても、どうしてそこにゴミが有るのかをわかっていても、今まで、これといった具体的な方法はとられませんでした。

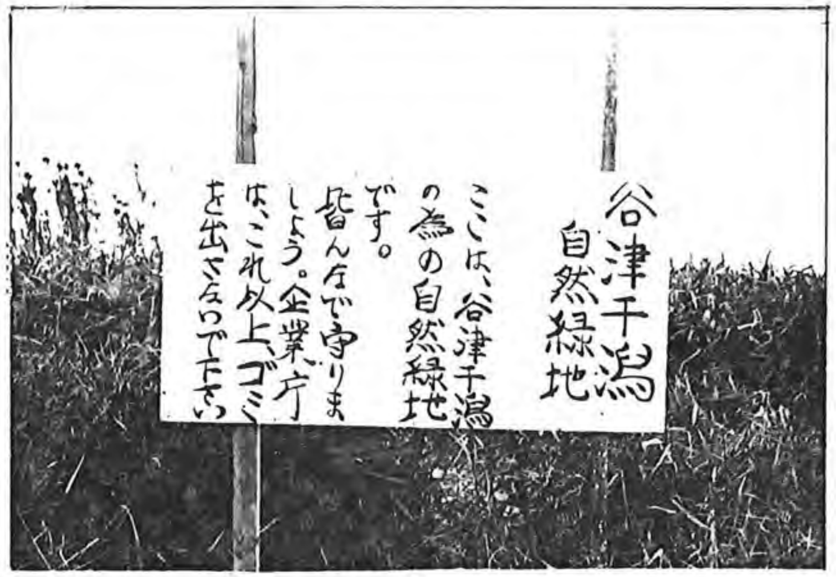
こういう看板を、たとえいくつ作ったとしても、はたしてどれ程の効果があるのか、はっきりわかりません。しかし、私達としては、少しでも、わずかにでも干潟そのものをきれいにする為に役立ちそうなことは、出来るだけの方法で、何でもやっていくつもりです。

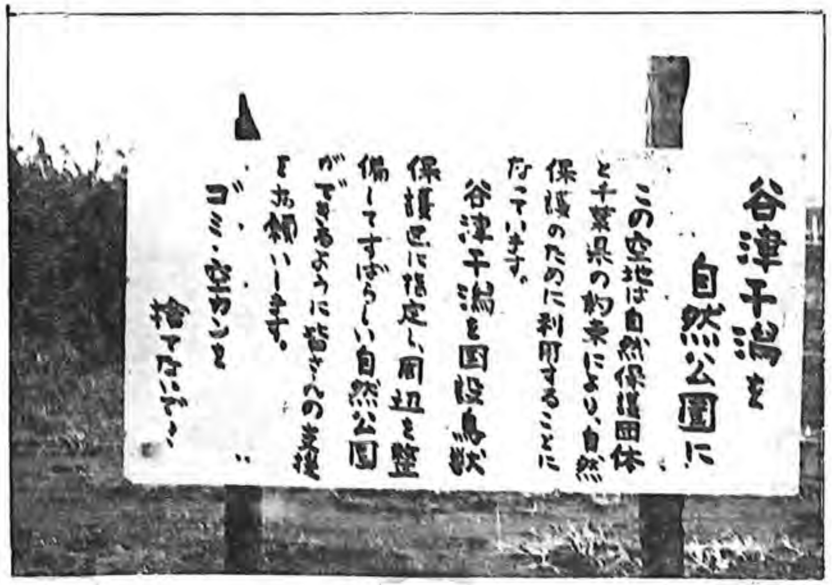
干潟の生きもの達は、生きる為、住す為にそこにいるのであって、彼らにしてみれば、見られる為、観察される為にそこにいるのではありません。見るとか、観察するとかいうのか、「人間のがわ」からのことだけであって、干潟の生きもの達にとっては、「見られる為」ということは何もないからです。


谷津干潟を
きれいにしよう
一、「ゴミは自分で
持ち帰ろう
二、空カン、空ビン、
石などを、干潟の
中へ投げないで下さい」
特に、企業庁は、工事
に使ったゴミを、その
ままにしないで下さい


谷津干潟
自然教育園
谷津干潟を皆んな
の力で守りましょう
ここは、市民と干潟の
生きもの為の自然
教育園です
明日をになう子供達
の為に、きれいにしよう
企業庁は、工事で使った
ゴミをやたらに捨てな
いで、きれいにして下さい

これらの看板は、千葉県野鳥の会・千葉の干潟を守る会・谷津干潟愛護研究会、その他個人のボランティアなどの協力によって作られております。


谷津干潟
自然緑地
ここは、谷津干潟
の為の自然緑地
です。
皆んなで守りま
しょう。企業庁
は、これ以上、ゴミ
を出さないで下さい


谷津干潟を
自然公園に
この空地は自然保護団体
と千葉県の約束により、自然
保護のために利用することに
なっています。
谷津干潟を国設鳥獣
保護区に指定し、周辺を整
備してすばらしい自然公園
ができるように皆さんの支援
をお願いします。
"ゴミ・空カンを
捨てないで"

ふかんど

第123号

1981.12.25

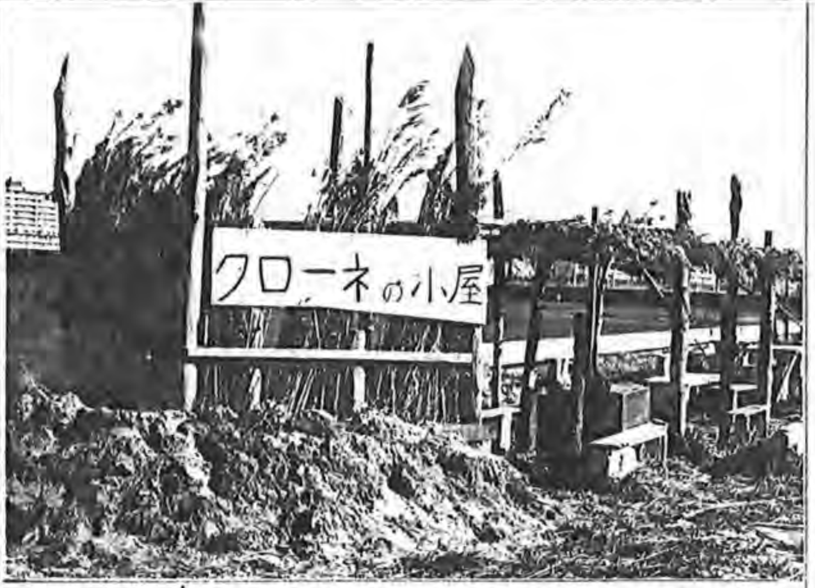
谷津干潟愛護研究会
〒272 市川市本北方二ー三五ー六
電話（〇四七三）三八ー六六六八
文責 森田三郎

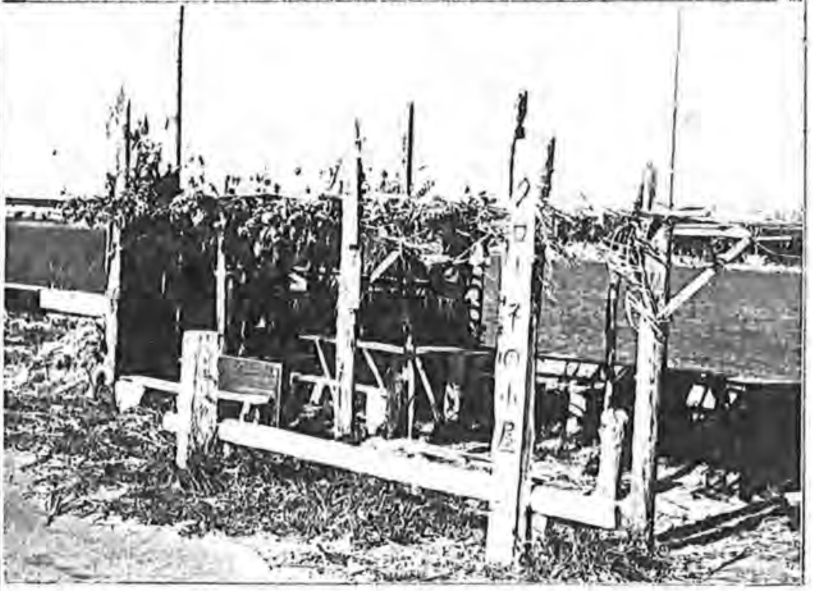
会費年2000

創刊
1980.6.3

〈子供の頃、今頃は「べえゴマ」の季節だった。そこは「子供だけの世界」で、大人はアンタッチャブルだった。〉

『クローネの小屋』





ある家族連れの方が、そういう名前を付けてくれました。親と子供達とそう言って、この小屋が大変気に入ってよく来るそうです。でも、どこの誰だか私達は知らないのです。「谷津干潟野鳥通信箱」の中のノートに、そのことが書いてありました。

今まで私達は、土人小屋とか自然の家、あるいはあずま屋なんていろ〳〵な呼び方をしていました。でもこの際、その家族連れの方が付けてくれたように「クローネの小屋」と命名することにしました。

クローネの小屋は、ヨシ・流木・竹・セイタカアワダチソウで出来ています。さて、私達はクローネの小屋を、谷津干潟の名物、シンボルにしようと皆んなで考え、いそいで作り直しているところです。

でもね、「クローネの小屋」っていろ〳〵調べたけど、今だに何だかわかる人はいないんだぁ。

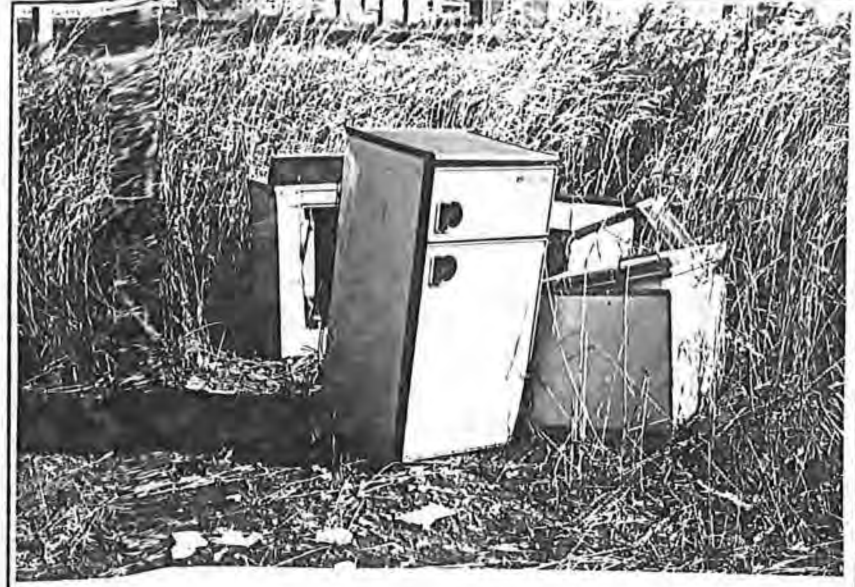
第40回 谷津干潟クリーン作戦

十一月十七日に行なわれました。

参加者は、松枝多加子さん（谷津三丁目・主婦）・宮川郁子さん（谷津五丁目・主婦）・森田の三人です。

私達は信じています。干潟とそこの生物にとって一番大事なことは、そこがきれいになり、すみやすくなることだと。毎回、細々とですが、クリーン作戦は続けられております。主婦の皆さん、すみません。私の生活の見定めがつくまで、今しばしこらえて下さい。森田は涙が出て来ます。

お振込は千葉銀行012—54253
谷津干潟愛護研究会

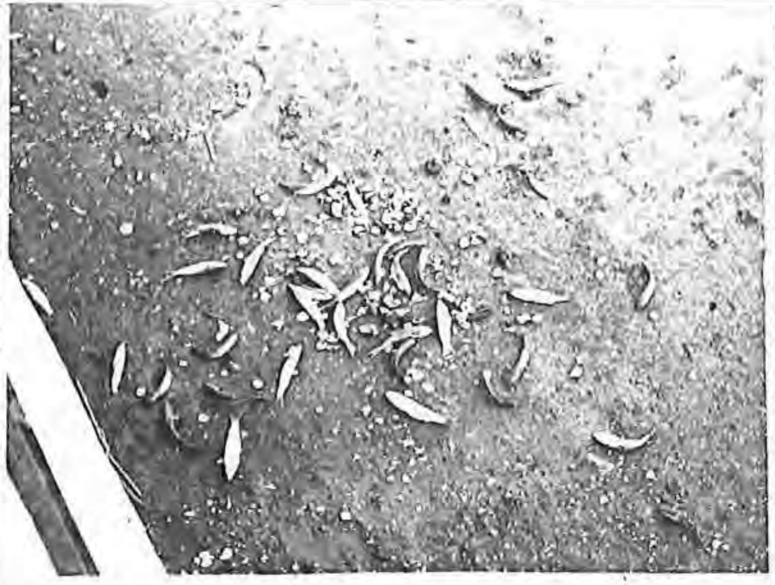


自然緑地の不法投棄物

センタク機、冷蔵庫が五つ。皆さん、かつての谷津干潟がこんな所だったのです。

捨てる方にすれば、きっと、そんなに悪気はなかったのでしょう。

こういうゴミを処理してくれるよう、行政に私達は交渉して来、又、私達もそうじしてきました。それに対して野鳥の会の方から、〝それは干渉行為だ〟と言われた。確かにそのとおりです。ではどうするか？何も具体的な事はしません。もしそれであったら、今頃、谷津干潟はゴミ捨て場になっていました。気落ちせずにやろうよ。



捨てられた魚がいっぱい

まだ生きていました。あるものは、口をパクパクさせ、あるものは時々ピクピクさせていました。

おそらく、投網の人がいらない魚を投げ出したのでしょう。堤防のすぐ下でした。私が行った時は、まだ魚の体がすっかりかわいていない時でした。もう少し遅かったら、皆死んでしまったでしょう。

魚たちを急いで水の中へ入れてやりました。こういう事が出来るくらい、谷津干潟には魚がたくさんいて、又とれるのです。でも、ちょっとつらいですね。

魚の群を見物しているのです

見物しているのは、近くの団地の主婦です。時は満ち潮で、水路を流れてくる潮と共に、魚の大群も泳いで来ます。その姿が見えるし、水音も聞こえます。

「わあーっ、いたいた」とか、「すごいすごい」なんて口々に言ったり、指でさしています。この下は、ちょうど砂の出ている浅瀬なので、とてもはっきり見えるし、魚も集まりやすいのです。

寒い頃になると、名物のカニは穴の中へかくれてしまいますが、魚はその頃にはとても大きくなっているのです。

野鳥保護

（学習研究社出版）よりコピー

＜お祈り---神さま、どうか大金を投じたこの本が
たくさん売れますように。お願いします。＞

谷津干潟というところ

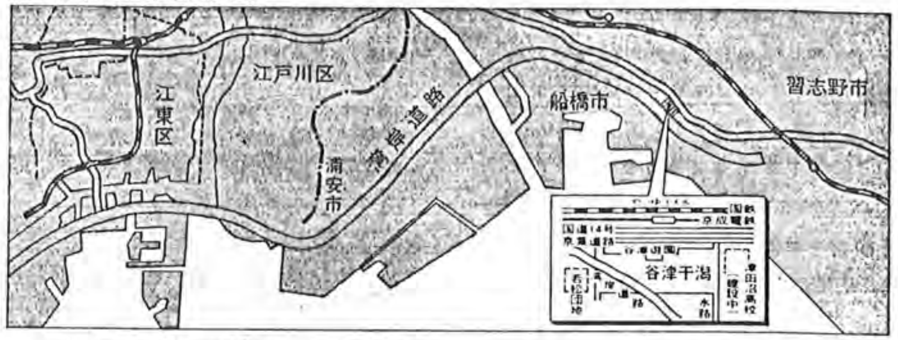
谷津干潟（やつひがた）は、東京湾の最奥部、千葉県習志野市地先にあり、ほぼ東経140度線上に位置する。北側は住宅地、残る三方は埋立地に囲まれ、東西の各両端には水路が通り海とつながっている。そのため、干潮と満潮のたびに、勢いよく潮が出たりはいったりしている。干潮のときには干潟がすべて現出し、満潮のときには、水面下にすっかり隠れ、これが日に2回繰り返されているのである。

谷津干潟は、全国でも有数の渡り鳥の飛来地として知られている。鳥の餌である魚介類に恵まれ、ゴカイやカニなどもおびただしく棲息しているからである。温かい季節の干潮時などには、文字どおり甲羅干しをするカニの姿で、干潟の大部分はびっしりと埋めつくされる。満潮とともに魚の大群がおし寄せ、いたるところではねまわり、あたり一面に水音を立てている。

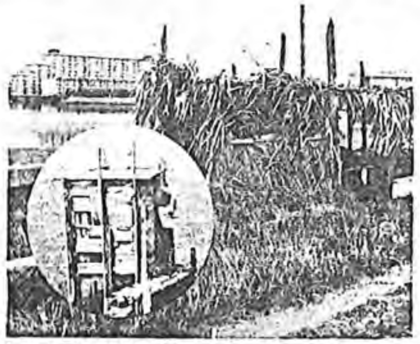
45haの広さの干潟には、四季を通じていろいろな渡り鳥の姿が見られるが、多いときには8000～1万羽の渡り鳥が飛来し、羽根を休めたり餌をついばんだりしている。シギ、チドリなどの水鳥たちにとって、この干潟は台所であり、食糧補給所である。

環境もはるかに今よりよかったと思われるかつての谷津干潟には、現在のようにおびただしい数にのぼる野鳥は棲んではいなかった。いうまでもなく、彼らの棲む場所がなくなってきたからである。開発によって東京湾の干潟はほとんど消えうせ、ほかに行く所を見い出せない野鳥たちは、追われ追われてこの谷津干潟へやってきた。

●谷津干潟と東京湾周辺



コアジサシの卵


あずま屋と水上観察舎

あずま屋のなかで仲間と研修中の筆者（左）

ひなを抱くコチドリ

このことを知った国と県は、この地を鳥獣保護区として保存の方針を決定した。

コアジサシとともに

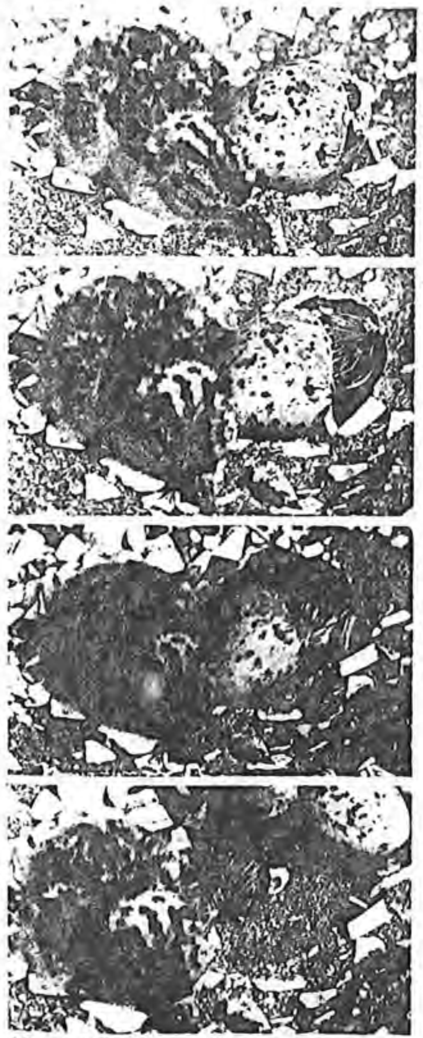
――荒川から花見川にかけての、コアジサシ、シロチドリ、コチドリの繁殖踏査より――

これら3種の鳥は、埋立地に巣をつくる渡り鳥である。コアジサシは南方のオーストラリアやパプア・ニューギニアなどから飛来してくる。シロチドリ、コチドリは、北のカナダやシベリアからやってくる。いずれも4月中旬から8月上旬ころまでが、その繁殖期である。

「彼らはいったい、どれほどの数の巣をつくるのか？　なんとしてもその実態をとらえ、記録に残しておきたい」そんなささやかな、しかし強力な想いに駆られたのが出発点だった。

葛西（かさい）、浦安、京葉港、幕張（まくはり）に広がる約

あずま屋のなかから望遠鏡で野鳥を観察する


炎天下、砂と貝殻だけの巣で、かえったばかりのコアジサシのひなと、孵化しつつある卵

Brummell（ブランメル）

「ブランメル」とは、今度学習研究社が企画・出版したもの。確か15サツ程のものかな。男性向きの、いわゆる「生き方の百科辞典」みたいなものであるとのこと。私達のことは、INTERESTS NO-11に入っている。こんな所で、こんなことをやっている人達もいるんだよ、と、そんな具合に紹介されている。「森田さん、客観的、説明的に書いてよ」と念を押された。

ふかんど

第124号

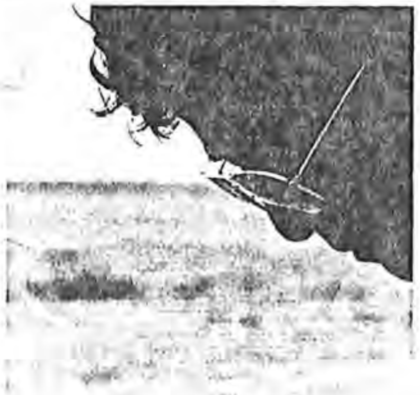
1981.12.27

谷津干潟愛護研究会
〒272 市川市本北方二〜三五〜六
電話〇四七三―三八―一六六八
文責 森田三郎

会費年2000

創刊 1980.6.3

お振込は千葉銀行012―54253
谷津干潟愛護研究会



孵化したばかりのコアジサシの卵を観察する筆者

3000haの荒涼たる埋立地。浚渫（しゅんせつ）され乾燥しきった砂と貝殻の砂漠のような地に夏の太陽がぎらぎらと照りつける。足もとは砂にめり込み、強い風が吹くと大砂塵が舞う。朝霧の立ちこめる日や雨あがりの陽ざしが強い日は、視界がさえぎられ方角もわからなくなる。

夜は野犬の群らがる草原で夜つゆに濡れながら野宿し、夜明けとともにコロニー（集団繁殖地）へと足を運ぶ。

鳥たちは、砂や貝殻あるいは小石まじりの埋立地にお椀形の窪地をつくり、ここに卵を産む。草や藻を使うぜいたくすら彼らにはない。気温の低い日や雨の日は、親鳥は卵を抱き、暑い日には立ちあがって小さな影をつくり卵を保護する。

広大な埋立地を、短冊状にまたはジグザグ状に歩きまわって彼らの営巣をひとつひとつ捜し、チェックしていく。繁殖

谷津干潟付近の造成地に翔ぶヨシゴイ

の4か月間、それを繰り返し続けるのである。チェックした巣には、一定方向に短い棒を立てる。

荒川の岸辺から花見川まで1サイクル7～8日かかる。それをまた花見川から荒川まで観察して歩く。葦原、草原、水溜まり、泥地などいかなる環境の場所へもひとりで踏み込んだ。全身砂だらけ、強い陽に焼け、目も窪んだ。靴や服をつけたまま海に飛び込んで体を冷やし、しずくをたらしながらなおも歩いた。

そこはまさに"繁殖の海原"である。大都会の足下にこれほど強靭な小動物の生の営みがあるなどとだれが考えたろう。三種の合計約8000巣と2万1000の卵を確認できた。

幼い日の想い出

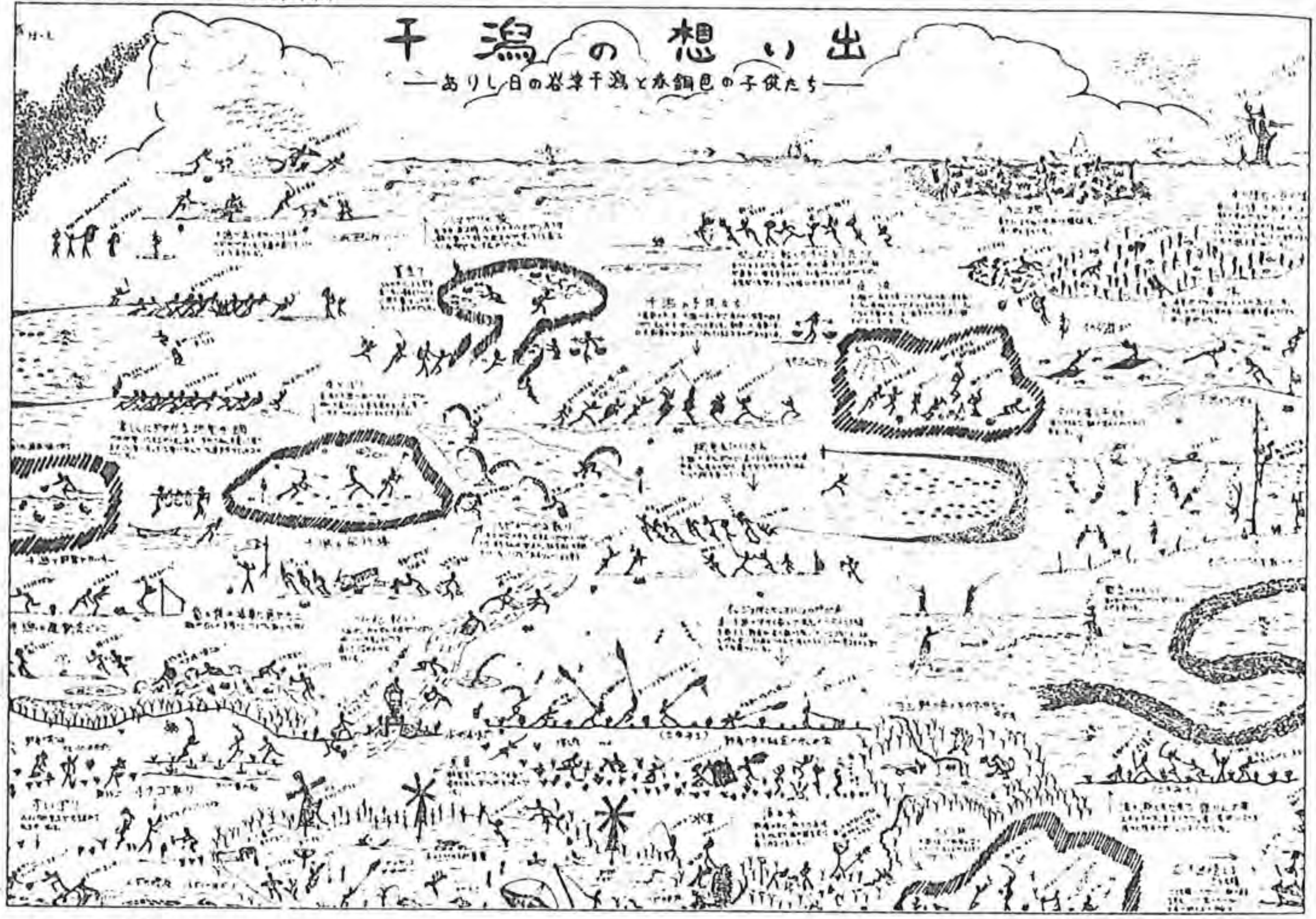
かつての東京湾は広大な干潟に囲まれていた。干潟には海苔、貝、魚が産卵し、育つ宝庫だった。人間も鳥もここの魚やカニを採って生きていたのである。江戸前のにぎり寿司にしても、干潟の魚介類がなければ考えだされなかったかもしれない。

幾種類もの野鳥が飛び交い、強い潮の香の漂う海には魚が群れ泳ぎ、堤防を隔てて田んぼや野原が広がり花も咲き乱れていた。かつての干潟は、まさに子供たちの楽園であった。そして今、開発によって工場、公団住宅が建ち並ぶこの地に立つとき、破壊された自然、奪われた権利の大きさを改めて思う。

ボランティア活動

谷津干潟のために、なにができるかを考えてきた。どうしてできないかよりも、どのようにしたらできるかが大事だった。できないことを数えたてるより、できることを探してきた。

●筆者が描いたかつての谷津干潟



干潟の想い出
—ありし日の谷津干潟と赤銅色の子供たち—

130本の看板を立てる

本格的に「谷津干潟を守る会」の活動をはじめた昭和50年ころ、地域の市民には谷津干潟という名前やそこがどういうところなのかあまり知られていなかった。そこで、干潟のそばにきたらだれでもわかるように干潟全域に看板を立てた。

松の苗木を100本植える

かつて谷津干潟の波打際には松林があったことを想い起こし、干潟が住宅地と接する幅30mの草地の堤防沿いに植えていった。端から端まで400m、近くの住民の人も手伝ってくれた。その後、枯れたり折られたり盗まれたりしたのを除いて約50本が育っている。

テーブルとベンチをつくる

干潟のそばのヒバリやヨシキリ、シギ、チドリの声が聞こえる草原に、テーブル30、ベンチ120ほどをつくって置いた。素材はすべて干潟に打ち寄せられた流木を利用して組み立ててつくった。

京葉港に群れ翔ぶウミネコ

あずま屋——谷津干潟自然の家

"土人小屋"と呼ぶ人もいるように、南方の原住民が住むような小屋。これもまた流木と竹、そして近くに茂っている葦でつくられている。子供たちの野外活動、食事やおしゃべり、そして野鳥観察ができるようにつくった。

水上観察舎と野鳥観察舎の建設

前者は、堤防から20mくらいの桟橋をつくり1間4方の小屋である。これもすべて流木を利用。小屋の下を満潮が洗い魚が泳ぐ。後者は市民有志の浄財を集め間口4間、奥行2間のプレハブを建て、図鑑類などささやかながら備えてある。

谷津干潟クリーン作戦

昭和55年3月、第1回谷津干潟クリーン作戦が行なわれた。地元習志野市民とくに主婦が中心で、月2回行ない、清掃活動が目的である。現在では前田建設、竹中土木、大蔵省、県企業庁、習志野市、京成電鉄の協力も得て昭和56年8月で36回になった。

将来、谷津干潟を国設鳥獣保護特別地域に、また、市民のボランティア活動の総力を集め、その根底となって支え得る都市のなかの"自然公園"とすることがわれわれの念願である。　（森田　三郎）

ふかんど

第125号

1981.12.30

谷津干潟愛護研究会
〒272 市川市本北方二〜三五〜六
電話〇四七三ー三八ー六六六八
文責 森田三郎

会費年2000

創刊 1980.6.3

（1977.8.産経）

房総の史跡

船橋大神宮の灯明台

明かりはランプ

信仰深い地元民が建設

1977.8月 朝 (産)

船橋港近くの船橋大神宮境内の一角、木立ちに囲まれた海岸洪積台地に「灯明台」が建っている。

灯明台は、船橋港に帰港する漁船の道しるべとして明治二十二年、大神宮の信仰深い地元住民たちによって建てられた。建物は三層の塔を思わせるような木造カワラぶき三階建て（延べ面積八五・五平方㍍）で、高さは一二㍍もある。三階部分の光源塔は六角形づくり。洋式灯台の影響を受けた全国でも非常に珍しいものだ。

海上を照らす明かりはランプを用い、反射板には錫（スズ）を利用しているのが特色。灯明台の火と沖合の州を結ぶ間には「一本杭」「二本杭」と呼ばれるクイが打たれ、船の航路と漁区の境界線になっていた。

近代的な洋式灯台は諸外国の技師で明治二年に観音崎灯台が建てられたのに続き、銚子、野島崎などで相次いで建設された。いずれも官営だったが大神宮のそれは民営で、地元民は「灯台」という新しい呼び名をきらい、「灯明台」と呼びつづけて来た。

船橋沖の東京湾は、カレイ、イカ、カニの宝庫として知られていた。ところが、工場の進出などによりこの十年は海の汚染がひどくサカナも少なくなり、漁場も京葉港建設により狭まった。現在、灯明台は使用されていないが、年老いたある漁民は「灯明台がともっていたころはサカナもよくとれた」と昔を懐かしむ。

灯明台の建物は昭和四十年に解体修理され、見事に復元された。正月の三が日は初詣で客に開放されている。県では灯明台を民俗文化財に指定（昭和三十七年）した。【あし】船橋市宮本五ノ二。

京成大神宮駅で下車、北方に約二〇〇㍍、大神宮境内の丘に塔が建っている。

「ふかんど」時代を訪ねて

子供のころ、私は、「あんなぁたけえ所からぁ小便すんばぁ、気持いいべなぁーーーーし」と思いながら見ていた。テッペン目がけて、しょっちゅうパチンコをぶっ放していた。それが右の、史跡・灯明台である。

その頃には、こじきとすみついていた。こんな所にすんでいるこじきを見ても、かわいそうだとかきたないという思いよりを、「夜んなんば、おっかなくて気持ちわりいのに、どうして平気なんだべえ?」、スゲエなあつえなあ、寝ちゃえばぁわかんねえのかなぁし」と思っていた。

母から、「さぶろう、いいかぁ、夜んなんとなぁ、あのお宮にはよお、人さらいがいてよぉ隠れてんだかんなぁ、いくんじやゆえどぉーーーし」と言われたことがあった。

半分くずれかけた土塀、なわとおけと木の車の深い井戸、苔むした古い木や土や石など。昼はいいけど、ほんとうにお化けが出てきそうだと思った。今はなんの面影もないけど、高い木に囲まれた深いみどり色によどんだ、すり鉢形の池があった。夜など、やむなく通る時、できるだけ遠まわりをして、わざと顔をそむけ、下駄をぬぎ、覚悟と心構えを整え、向うべく前方を見つめてから、「ヨオーッ、セイノォセイッ!」とばかりに、どう気違いの如く池のよこ、境内をかけ抜けたのであった。「あぁーっあぁーっ」とか、「バカヤローッバカヤローッ」などと、大声で叫びながら両手に下駄をとってメチャクチャに走ったものだ。「もういいべえ」と思った所まで来ると、こわごわと後を、誰かが、何かが来てないかと、ハァハァ言いながら見つめたのであった。

そこも今は、近代化され、かなりスケくになっている。神主やおまいりの鈴にパチンコをぶっ放す子供は、もういないのである。

デスクワークとフィールドワーク

何でことないですよ。つまり、冬と夏の「あんばい加減」ですよ。

冬は寒いから、ものを読んだり書いたりしてえ、夏みたいな陽気のいい頃は外に出て、体を使うことをやった方がいいんじゃないかと、そんな思いからです。

何しろお、干潟や埋め立て地っちゅうのは、身をかくす所はないし、天気の影キョウをもろに全身に受けるからねえ。

いやぁ、別に、方針とか計画だとか、こうすべきだなんて改まって受けとらないで下さい。まぁ、ざっくばらんに今までの経験からでえ、そ、そう、動物的・生理的な感覚から申し上げてるんですよ。

冬は中、夏は外。とにかく私の場合はそうだった。今もそう。そうしたとか決めたんじゃなくって、自然とそうなっちゃったー決まっちゃったんですよ。

冬の干潟は寒いからねえーーー寒いよぉ。気温よりも、風のある日の方が大変だ。吹きっさらしだから、ハナ水はたれるし、手がかじかんでくる。鳥を見るだけだったら、ガッチ〳〵に着込んでしまえばいいんだけど、長ぐつをはいて、どんな汚い方をしてもいい恰好してるもんだから。

冬こそ、常日頃から読みたいと思っていた本をいっぱい、たっぷり読むのがいいと思っている。又、いろんなものを整理したり、想いにふけるのもいいと思う。浮き世の義理を、出来るものならこの時期にかためてやっておく。

冬は、充電の時、静の時、内なる自分を固め、つくろい、想いを未来に、現在に、そして過ぎ去った月日の自分を思い返したらいい。

そんな具合に、冬は、広い意味での「デスクワーク」のような気がする。もっとも、私は、机の上で何かをするなんて全くないけどぉ。

夏、気候のよい時はこの反対だ。手につばきし、ウデをまくり、刀を振りかざす時である。

ちょうど、ターザンかゴリラがやる如く、両手で胸をたたき、「ウォーッ〳〵」とやる時だ。生あったかい、湿った風が吹き、鼻の穴や肌を排発する時、幼少の頃そうだったように、あの原始的、動物的、本能的リズムが、その〝ドラムの音〟が、己れの奥深い所から、静かに、しかもしっかりと聞こえてくる時だ。それは、あやしきまでの響きであった。今もなおそれは消え去ることはないのだ。つまり、

年過たる習慣のきずなに心いらだち
冬のねむりより再び
野性の血はめざめる

とまあ、そんな調子なのだ。夏も、冬と同じく、広い意味でのフィールドワークなのである。

私は知っている。水も、木も、土も、草も、そして葉っぱも、冬と夏は違う匂いがするのだ。

BOOK『青淵回顧録』渋沢栄一

「伝統と現代」 特集＜人間と自然環境＞ 1978年9月 NO.54より

ふかんど

第126号

1982.1.3

谷津干潟愛護研究会
〒272 市川市本北方二ー三五ー六
電話〇四七三ー三八ー一六六八
文責 森田三郎

会費年2000

創刊 1980.6.3

谷津干潟を残すためにこの絵を使いたいのです

森田三郎

この絵を画いたわけ

見てわかれば、それでよい。私が思っていることを、知りやすく、わかりやすく、イメージがうかんだら、絵を画いた目的は達した。

たとえばある人から、「ねえ、干潟ってどんなところ？　そこで子供たちはどんなことをしていたの？」、と聞かれたら、この絵を〝パーッ〟とひろげる。「ほら、これが干潟さあ、谷津干潟で過ごした私の少年時代だ」とか、「谷津干潟自然教育園とは、こんなところにしたいのさあ」てな具合にやる。そうすれば、一目で、一パッでわかるから「わあーい、すごい、これみんな本当にあったのお、これみんな森田さんが子供の頃のことなのねえ！」こんな調子でよい。

「干潟の想い出」の原図は、3・8ｍ×1・7ｍです。この絵はその一部分です。ほんとうは長さ10ｍぐらいのものを画きたかった。もう少し齢をとったら、思う存分画いてやろう。

絵を画いたいきさつ

三年半前、谷津干潟の写真が新聞にのっていた。でも、私が少年時代を過ごした干潟は、まわりの環境も、呼び名も変っていたので、「この谷津干潟はもしかしたら……」と、そんな具合にしかわからなかった。しかし、写真の中にある、杭の立ちかたや並び具合に見覚えがあった。25年前、かつて〝ふかんど〟と、私たち少年が呼んでいたところ、それが今は谷津干潟という名前で呼ばれていた。わかってから、急になつかしくなり、いろんなことを想い出した。変り果ててしまった〝ふかんど〟が、何だかとてもかわいそうに思えた。谷津干潟だって、何も自分から好きこのんできたなくなったわけではないのに。それなのに、ゴミを捨てられ、たくさんの下水をタレ流されて、「くさいから、きたないから、いっそうのこと埋めてしまえ」、「どっちみち悪くなるんだから」、「何だぁこのうみぃ、ゴミがいっぱいじゃねえか」なんて言われている。私はそんな言葉を何回も聞いて来た。そして、いつもくやしかった。谷津干潟だって、ほんとうはきれいでいたかったのだ。私は思う、私は知っている、「きたない、よごれた海なんて無いのに。ほんとうは、きたなくされ、よごされた海があるだけなのだ」と。私だって、こんな絵なんぞ画かなくてもよい、そんな谷津干潟であって欲しかった。25年前の記憶をたどりつつ、一つ一つ想い出しながら、「こういうことがあったっけ、そうだ、あんなこともあったなあ」と、いそがしさと眠たさのうちに、ポチポチと画いていった。絵の覚えはなかった。全体の構図は苦労した。でも、何とか、どうにかして画き表したいと思った。「ありし日の谷津干潟周辺と赤銅色の子供たち」は、そのようにして、6ケ月かかって画き上げた。

絵について思うこと

干潟の想い出の絵は、決して記録や、資料として画いたのでない。見るためのもの、鑑賞するものではありません。一つ一つがみんな、ものがたりなのです。たとえば〝いさり火〟。家の用もせず、日暮まで遊んでいて、私は木に登っていた。その時、うみに続く坂道を母が仕事から帰って来た。前を行く人が持っていた弁当箱の中で、ハシが〝カラッカラッ〟と鳴っていた。母はすこしうつ向き加減で、何かをじっと考えているようであった。背中を丸めた母のうしろ姿。「母ちゃん何考えてんのかな、仕事で疲れたのかなあ」と思っていた。母の背中、何だかさびしそうで、かわいそうな気がした。子供心にも、そこに、いつもの母とは違うもう一人の、別の〝かあちゃん〟がいるみたいだった。そしたら、こんなことをしている私が、いけない子のように思えた。そして悲しくなったぼくは一人海辺へ行き、泣きながら夜の海にチラチラうつる、にじんだいさり火を見ていた。すぐ前で波が〝タップタップ〟と打ち寄せ、シギが〝ツピーッツピーッ〟と鳴いていた。

叱られて、裸足で家をすっとび出したことも何度もありました。家へ帰れず、腹が減ってしょうがなかった。夜の木の上、暗いしげみの中から、白熱電灯の家の中で、うち中うまそうに夕めしを食べているのをじっと見たこと、そんなことをしょうこりもなく繰り返していたのでした……。

自然教育園の絵は、多くは図鑑を見ながら画いた。画きながら、私が想像していたよりも多くの生きものたちが、次々とその姿を消していったことを改めて思い知った。「あれっ、これもいたのに」てな具合に。種類は勿論、数においても比較にならなかった。海の生物、また水の生物、鳥も昆虫も植物もみんな彼らのすみかだったうみや川、沼・田んぼ・野原・樹木などは、よごされるどころか埋められてしまった。所々に、私の少年時代のことを画いた。これを中心にして、他のものは付録として画けばよかったと思う。

利用手段としての絵の使いみち

「さあーて、何に使おうかなあ……」これが実感だった。ただ一つはっきりしていたことは、この絵を、谷津干潟を残すための、ダシに使うことだった。何しろ作品ではなく、見られたシロモノではないので、「いかに役立てるか！」、これしか考えない。私は自然保護運動の、評論家や裁判官じゃないし、検事やサロンの人間でもない。谷津干潟をいかに、どうやって、どうしたら残せるか。いつも腹をすかしたオオカミのように、いやしく、ガツガツと考えている人間だから。知識も理論も何もかも、どこかの偉い先生が何を言おうがどうってことはない、みんながみんな、谷津干潟を残すためのコヤシにしてやるのだ。保護運動という機関車を前進させるための、燃料みたいなものだと固く信じている、自然保護のクロマニヨン、私はそれでいい。みんなからほめられて役に立たないよりも、ケチをつけられ、バカにされても役にさえ立てば、私ははしゃぎまわってよろこぶのだ。干潟を残すために使用価値があるなら、他のもの全部――人の意見や考えや評価、そういうものはみんなノシを付けてくれてやる。「えっ何い、環境権、入浜権にも使えそうだって!?」、そうかいそれは素晴らしい、さあ、どんどん使ってやろう。広い意味での、教育権にも活用出来るかも知れない。情操・社会科・理科・歴史など、何でもかまわない。母校の小・中学校の校長先生のところへ持って行き、わけを説明してみたら、両校長先生とてもよろこんでくれて、両方で6枚も頼まれた。お金も払ってくれた。ぼくはうれしい気持で門を出た。でも、すぐ後、うれしいと思っていた自分がくやしくなった。あの変り果てた〝ふかんど〟、谷津干潟のことが心に浮んだからだ。「おい、そこでよろこんでいる森田三郎、お前はいったいどこの誰なればよろこんでいるか？」と。そうだ、戦はこれからだ。今日のことはそのための、単なるゴングにすぎないのだ。母校の先徒は都市化しており、潮の匂い、海辺育ちを思わせる赤銅色の肌をした少年はいなくなってしまった。海が埋立てられてしまい、遠くなって生活や教育とは無関係になってしまったからだ。東京湾には、もう再び、あの赤銅色の子供たち――我は海の子たる少年の姿は見られないのだろうか？

私のこと

私は昭和20年7月7日に生まれた。東京湾の最奥部、船橋市の宮本町、海に近いところだった。私の家は漁師ではなく、海にくらしをたずさわっているのでもなかった。どちらかというと貧しい、両親が働いている家の一人の少年だった。だから、学校から帰って来ても、家の中はうす暗くて、「ただいまあーっ」と言っても誰もいない。井戸はつるべ井戸で家はカヤぶき屋根。大きなコケのかたまりがたくさんむしていて、季節になるといろんな草花が花を咲かせた。流しも水おけも便所もみんなそと。流しはヘチマの棚の下にあった。マキ割り、水汲み、庭のそうじ、朝夕のご飯とおつけをつくることなど、それらは子供の仕事だった。うちの用をきちんとして、親が帰って来るのを待つのはいい気持だった。でも、そんな日ばかりではなかった。広い

（フィールドワークが全く出来なかった、ギプスと松葉杖の頃、今の私に何がやれるかを考えて・・・）

← 次のページへ

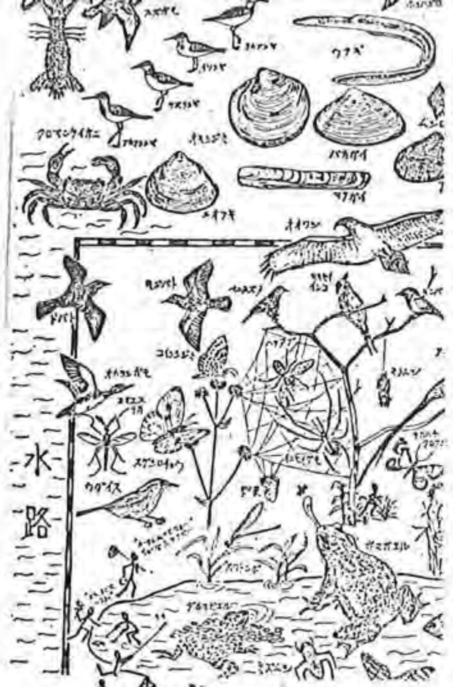
次のページに「この絵」があります。

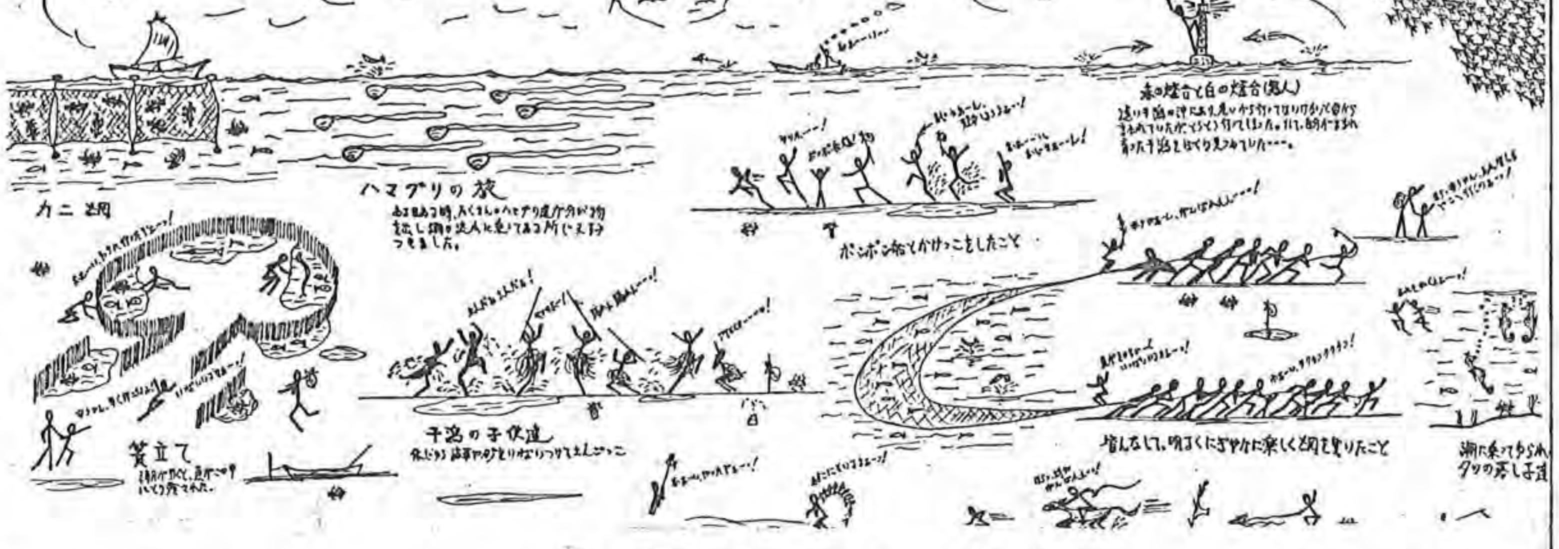
お振込は千葉銀行012―54253
谷津干潟愛護研究会

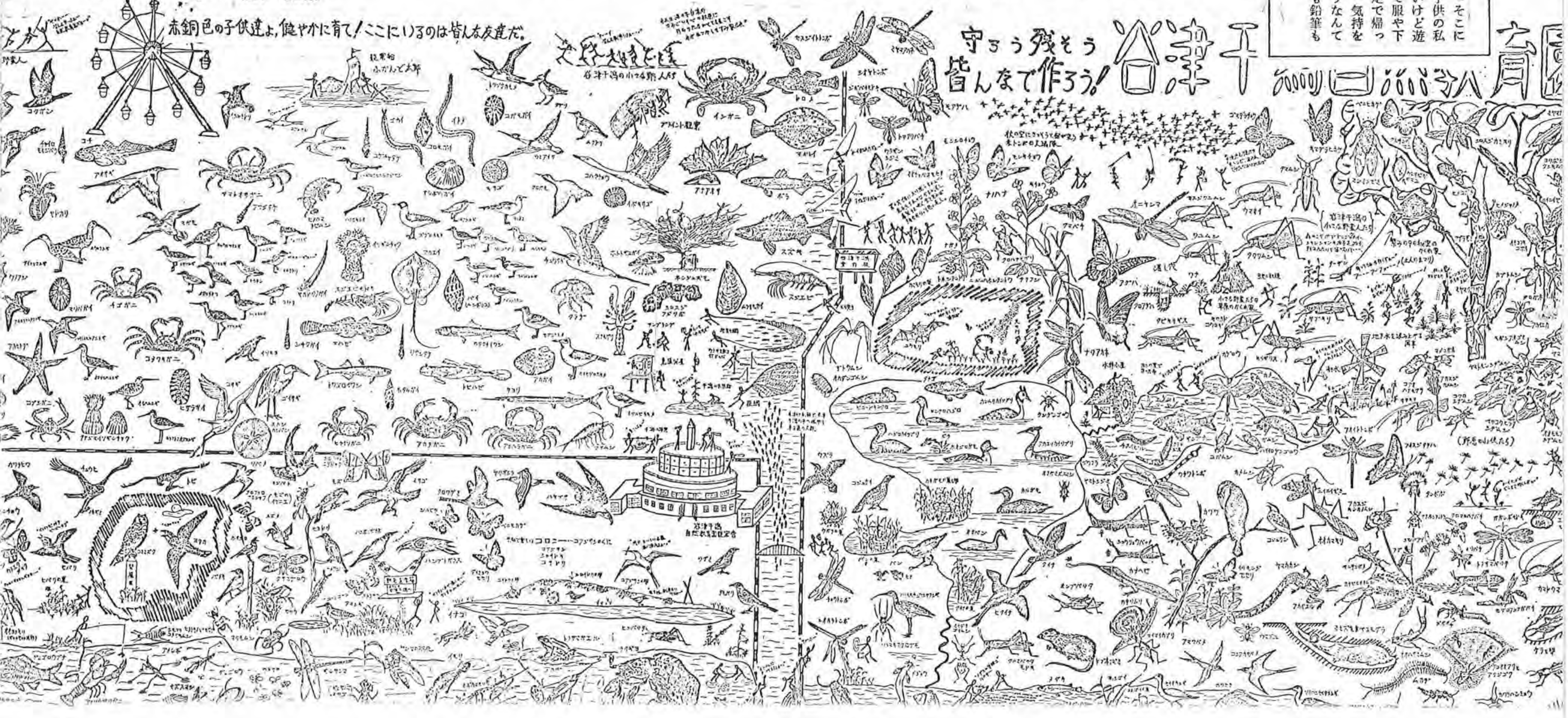
干潟の想い出

（一九七七・十月作成）1/5寸法

干潟と沼と小川と野原があって、木もいっぱいあり、そしてそこには、たくさんの生きものたちと私の遊び場があったからだ。子供の私の心には、うちの用をして母をよろこばせたい、母にすまないけど遊びたい、この二つの思いがいつも同居していた。暗い湧き水で服や下駄を洗い、くたびれて腹が減って、砂道をサクッサクッと裸足で帰った。そんな時、せつなく悲しいので、大きな声を出して歌い、気持をまぎらわす日が多かった。干潟を、調査しようとか観察しようなんて考えたことは一度もない。対しょう物でもなかった。ノートも鉛筆も持たない。ただそこには、生きた図鑑があった。


水路
クロベンケイガニ
ドバト
ウグイス


カニ網
ハマグリの旅
簀立て
潮が引くと、魚がいくら残された。
干潟の子供達
ボンボン船とかけっこをしたこと
赤の燈台と白の燈台(鬼人)
皆んなして、明るくにぎやかに楽しく網を曳りたこと
潮に乗ってやられ
タツの落し子達


赤銅色の子供達よ，健やかに育て！ここにいるのは皆んな友達だ。
観光船
ふかんど太郎
谷津干潟の小さな野人たち
守ろう残そう
皆んなで作ろう！
谷津干
育園
コサギ
インガニ
セスジイトトンボ
ミヤマアカネ
シオヤトンボ
アゲハ
ゴマダラチョウ
秋の空にきらきらと舞う赤トンボの大編隊

谷津干潟通信箱 〜みんなの声〜

ふかんど

第127号

1982.1.4

谷津干潟愛護研究会
〒272 市川市本北方二〜二五〜六
電話（〇四七三）ー三八ー六六六八
文責 森田三郎

会費年2000

創刊 1980.6.3

〈今頃、つるべ井戸から水を汲むと、ゆげが立っていた。井戸の水は冬は温かく、夏はつめたい。〉

昭和56年12月31日（木）

昭和56年も本日をもって最後となります。私達親子3人はこの一年を振り返って見た時に最も印象に深かった場所としてこの谷津干潟を文句なしにトップにあげました。

今このクローネの小屋にたたずむ時楽しかった想い出がよみがえって来ます。

それでは1人づつ感想をのべてもらいます。

吉田光宏 6才 津田沼幼稚園年長組

「夏の太陽がキラキラとしていた時、水にさかながぴょんぴょんぴょんぴょんはねていて鳥さんもカニさんもたくさんいました。来年も遊びに来ます。」

吉田安里 3才

「カニさんとサカナ」その他に何をおぼえていますか？「お弁当！」「クローネのハウス！」来年もまた来ようと思いますか？「うん」

吉田憲司 32才

本当にこの一年私共に楽しい想い出を残して頂きまして誠に有難うございました。子供達も幼い日のこの想い出を永久に忘れることはないでしょう。

この干潟の存続の為に尽力して下さった方々に深く御礼申しあげます。

昭和57 ~~年月日~~ 1 5（火）

きょう、やつへ来て、水を見ると、アオコがあり、水のそこにはガラスのわれたのや、ごみが土をかぶっていました。ぼくの声も、ボランティアの人とおなじように、ごみをすてないでほしいということです。

谷津干潟ボランティア活動は毎週日曜日に干潟で行なわれています。

- 谷津干潟クリーン作戦 第45回ー1月17日 第46回ー1月19日。
- 干潟鳥類カウントに参加して下さい。連絡 0474〜73〜3402 大爽方。
- 谷津干潟自然観察会 1月17日（日） 0474〜73〜3402 あるいは森田まで。

右の方が、「クローネの小屋」の名付け親です。でも、まだ、私達は誰もその方の顔を知らないのです。

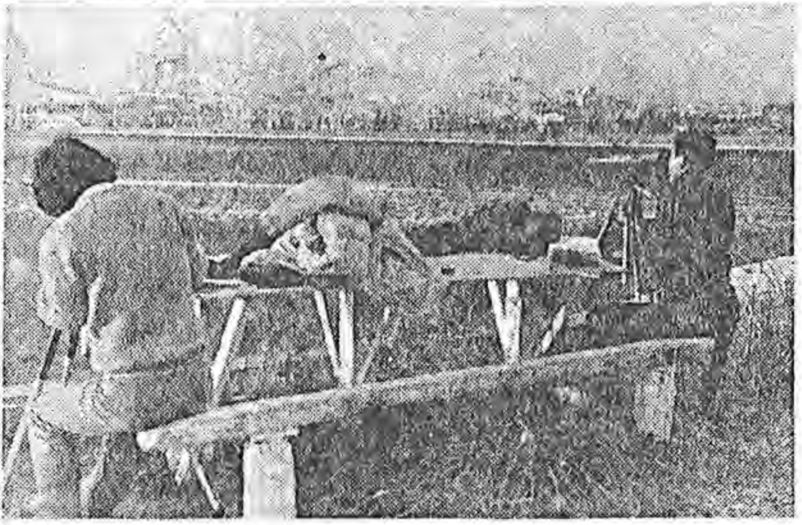
まさか、こういう人がいるなんて知らなかったし、思ってもいませんでした。実をいうと、その頃小屋はかなりこわれているところがありました。企業庁の長谷川業ム課長から、「なんだぁ、あのきったねえ土人小屋みてえのぁ、ブッ壊してしまえ‥‥」なんて言われたこともありました。

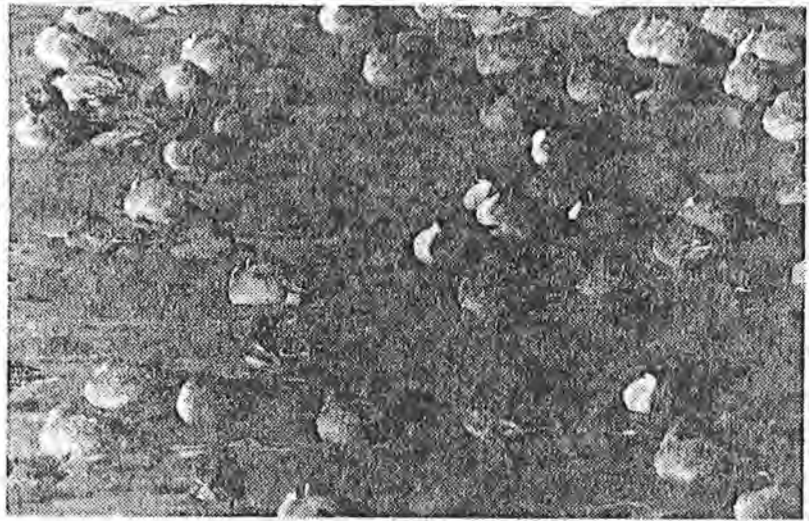
夏の間は、とても多くの人が「絶好の日よけ場ですなあ、自然味満点、ありがとう」と感謝して使いました。が、涼しくなり、そして冬になると、誰かがイタズラしても、壊されていても修理する人は出ません。それでも、絶望的に手が足りないながらも、私達は他の事の間に少しずつはやっていたのです。会員の人も、もっとキチンとして、谷津干潟のシンボルにしようという声もありました。日曜日ごとにボランティア活動をやっているので

← 次の頁へ

すが、やりたい事ばかり多くて、活動力は悲
しい位のが現実なんです。そんな時に、右の
ような方がいるのを知りました。それじゃあ
、と、皆んな大急ぎで作り直しています。

谷津干潟は
首都圏のオアシス
東京湾の象徴です。
千葉県が、全国に誇るに足る所です。
私は、日本の中の目ぼしい干潟を、いくつ
と見て来ました。いろんなタイプの干潟と、
その実情の説明を聞き、かつ調べて来ました。
一つとして、埋め立て計画のない干潟はな
いのです。そして、まさかと思いましたが、
改めて谷津干潟の重要さを知らされ、渡り鳥
の集中度がズベ抜けて高いのをわかりました。


毎日、観察に訪れる野鳥愛好家たちが多い


干潟で羽をやすめるカモ類

野鳥の楽園に異変

谷津干潟

カメラスケッチ

渡り鳥の飛来減る

エサ場埋め立て影響?

「キューン」「キューン」。大きな夕日を背にユリカモメの群れが舞い上がった。続いてカモ類。エサ場に向かうのだろうか、鳥たちは夕日の中で赤く染まった。すっかり潮がひいた干潟ではシギ、チドリ類が忙しく食事中だ。自然そのものの営みは、ここが高層マンション群、高速道路に囲まれた埋め立て地であることをすっかり忘れさせてくれる。

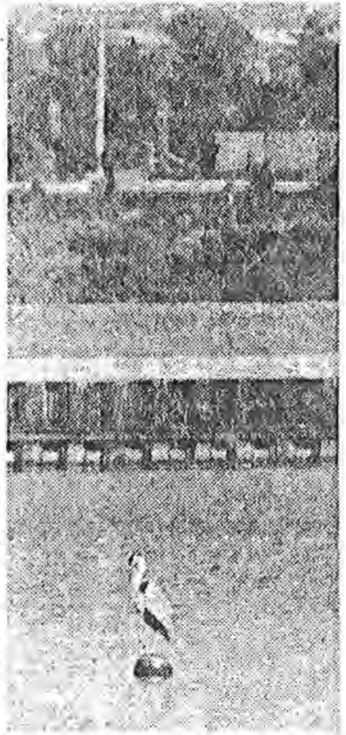
東京湾奥部に残された最後の野鳥の楽園「谷津干潟」＝習志野市谷津＝には、今冬もいろいろな渡り鳥が羽を休めている。オナガガモ、カルガモ、コガモ、ヒドリガモ、ハシビロガモ、スズガモ、マガモなどのカモ類、シロチドリ、ダイゼンなどのチドリ類、ハマシギ、ダイサギ、アオサギなど大小さまざまで、日本野鳥の会によると、これだけの種類が集まるところは国内でも数少ない、という。

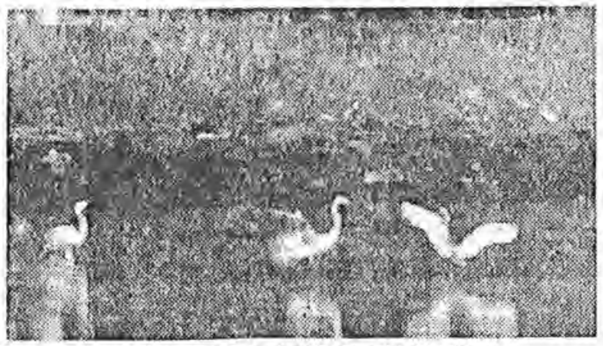
しかし、今シーズンはちょっぴり異変が起きている。シギ、チドリ類を中心に冬鳥の個体数がかなり減っているのだ。十年近く、この干潟の野鳥カウント（調査）を続けている東京都中央区日本橋浜町、中華料理店経営石川勉さん(三四)によると、従来は千羽単位で観測できたダイゼン、ハマシギ、シロチドリ類が、今冬は約半分しか数えられないのだ。カモ類もかなり減っている。

長年、谷津干潟の保存運動を続けてきた「千葉の干潟を守る会」「谷津干潟愛護研究会」などのグループは、その原因として、今年の夏までに、かつては干潟の一部だった京成谷津遊園の所有地約四・四㌶が埋め立てられたことをあげる。谷津干潟は木更津市の小櫃地区と並ぶ県内の貴重な自然干潟。京成によって埋め立てられた地域には、自然干潟でしか生活できないシギ、チドリ類にとって良好なエサ場があったのだという。

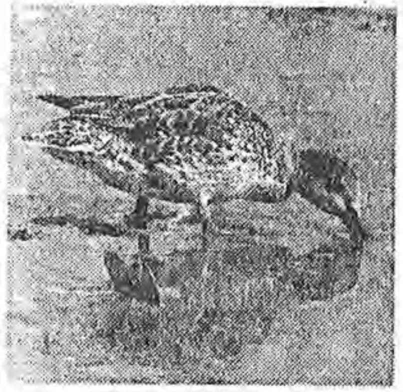
保護運動グループはこうした事態に「谷津をなんとか早く国設鳥獣保護区に設定して欲しい」と訴える。しかし、行政側の反応は鈍い。毎日のように干潟の清掃などをしている谷津干潟愛護研究会の会長、森田三郎さん(三五)は「このままではなしくずしに谷津干潟が埋め立てられてしまうのでは」。心配でならないというのだ。＝写真はいずれも谷津干潟で

【谷津干潟】 広さ約五十三㌶。京成谷津遊園に隣接する。この地区だけが国有地であったことから埋め立てを免れた。お隣の行徳鳥獣保護区（市川市福栄）は人工干潟のため、干潮時に完全な干潟が出来ない。このため、集まる冬鳥はもぐりの得意なスズガモなどに限られるが、谷津は自然干潟とあって、さまざまな鳥がやってくる。


浮標にとまってエサをねらうアオサギ


くっきりと白さが目立つダイサギ

めっきり数が減ったダイゼン


エサのコケをついばむコガモのメス

忙しくエサをあさるハマシギ

（朝日新聞）56.12.20

ふかんど

第128号

1982.1.6

谷津干潟愛護研究会
〒272 市川市本北方二〜三五〜六
電話〇四七三ー三八ー六六六八
文責 森田三郎

会費年2000

創刊
1980.6.3

谷津干潟通信箱 〜みんなの声〜

・夕方になると・・・カモ類は日没の頃、沖へ出てエサをとり、明け方に干潟に帰って来ます。シギ・チドリ類は潮が来ると埋立地に行き、潮が引くと干潟に入る。

昭和57年1月6日 水よー曜び
今日、ここをとおって ららぽーとへ行った。はじめてここをとおった。
鳥がいっぱいいてきもわるい。けど1羽ずつよく見ると、なかなか かわいい
けど私の顔をみて1羽がとびたった。すると2羽、3羽と次々に
とびさった。私はかなしい…。
かなしいところで ららぽーとでの出来事をはきまする。
今日、としちゃんのステッカーをかおうとおもったのにダイエーが休みで
うってなかった。再びかなしい…
そんで ~~2万4千~~ 24000円のスカートをむりやり着せられ、かわいい かわいい
とおだてられ、あやうく かわされるとこだった。あらかじめ、今日の私の
持ち金は1500円。でも、ほしい〜。だから私に愛の手を…

24000円がにくい。

夕方になると
鳥はどこへ行くの？
だれか おせーて!!
夜はこのへん静かでこわいっすね！

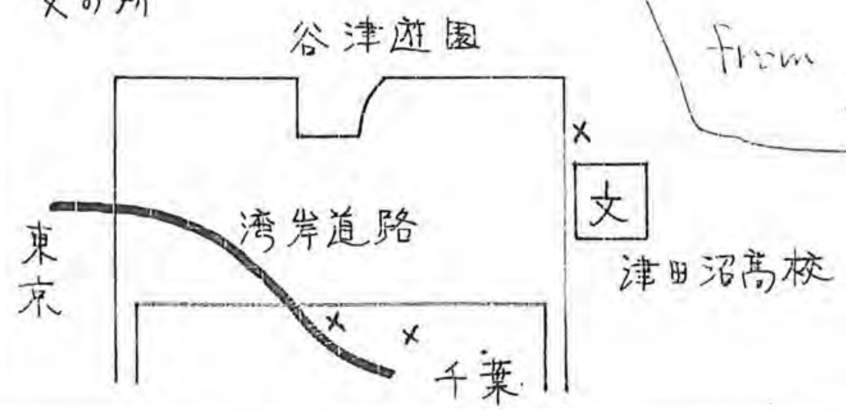
では
このへんで
また かくかんね

Good-by だっちゃ

from K.

通信箱のある所の図

×の所



なんだかぁよくわからないところもあるけど、まあ、こういうのも中々いいもんだねえ。要するに、いろんな人が、いろんな思いで、人それぞれの事情があるんだからあ、それをそっくりそのままで、干潟通信箱の所で書いてくれれば、それが一番いいと思っています。

私達は、谷津干潟を残したい、守りたい、少しでも良くしたい為に来ています。だから、昨年のような自然保護団体の争いや、感情ムキ出しのゴタくさ、この谷津干潟とここにいる生きものにもち込む事は、一切お断わりをしました。生きもの達には、全く関係がないのです。言動が、干潟保存を判断基準にせず、双方の思惑や、過去の人間関係から出ていたからです。いやだね。一方からは敵みたく言われ、又一方からは「彼らといっしょにやると為にならないぞ・・・」、なんて言われりゃ、バイくさあ。無い人手でゴミを拾い、看板を作り、穴を掘り、小屋を作り、ペンキを塗ってるのにい、何を言う。そんで、作ったのを使ってるのは、彼らさあ。

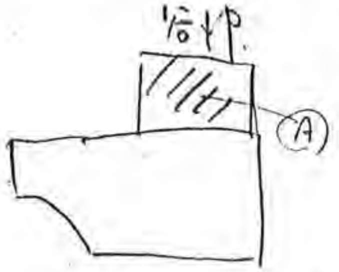
お振込は千葉銀行012—54253
谷津干潟愛護研究会

谷津干潟通信箱 ～みんなの声～

「谷津干潟っ子」

'81、12、24　ハレ（晴）

中村総司



A地点が 埋めたてられてから 始めてきた。
びっくりした！
「何と 干潟が 狭くなったのだろう」というのが
まず 実感であった！

・干潟の 生き物は 埋めたてられても
何も いわぬか？
・もし 人間が 自分の 住家を 奪（うば）われたら
これを 何というであろうか？。
自然が 黙っている筈がない
天が 黙っている筈がない

必ず
・騒音公害とか、
・汚水による害とか
何らかの 形で 自然は 報復（ほうふく）するであろう！

・TODAY BIRDS
（TOMMOROW MEN.

「今日の鳥は、明日の人間」という言葉があるが
私は それより 一歩 進んで
・Yesterday Birds
（Today MAN.
「昨日の 鳥は、今日の人間」
と思っている！

五十嵐さん程、埋め立て地のいろいろな姿を撮っている人はめずらしい。渡り鳥をはじめ、植物、昆虫、カニ、魚、風景、地理環境、そして、移りゆく埋め立て地のありさまを、静かに根気よくカメラに収めています。

中村さんという人、時々私に、励しのお手紙をくれます。書かれている事からみると、身近なこと、足もとのことを大事にする方らしい。でも、私はまだ会ったこともなりし、話しもしたことはなりのです。

朝日新聞 57・1・8

▲東京湾岸の埋め立て地を舞うアカツクシガモ＝五十嵐吉夫さん写す

ようこそアカツクシガモ

幕張の浜を 12羽が舞う

千葉市幕張海岸の埋め立て地に、珍しいカモの群れが飛んでいる。日本野鳥の会のメンバーや鳥の観察が好きな人の話だと「アカツクシガモ」だという。百㍍ほどに近付くと逃げてしまうが、肉眼でもキツネ色の美しい羽が見える。羽の先端や尾は黒色で、首に黒い輪がある。

原色日本鳥類図鑑（保育社刊）によると、中国大陸の北部やモンゴル、欧州東北部で繁殖するが、日本にはめったに飛来しない。幕張の埋め立て地では一昨年秋に一羽だけ姿が確認されたが、今冬は十一月から十二羽がやってきた。

東京湾岸の野鳥の写真を撮り続けている五十嵐吉夫さん（東京都葛飾区南水元）は「珍しいカモを撮影したい、というマニアがきている。カモが落ち着いて生活できるようマナーを守ってほしい」といっている。

ふかんど

才129号

1982.1.7

谷津干潟愛護研究会
〒272 市川市本北方二ノ三五ノ六
電話〇四七三ー三六ー六六六八
文責 森田三郎

会費年2000

創刊
1980.6.3

『ふかんど』は
乞食になっても
出します

大丈夫です。心配しないで下さい。この森田、乞食なるコスチュームを身にまとって、皆さんの家には〝おもらい〟には伺う気は更々ございませんから。

まぁ、これ位の覚悟を持って、やっているところもありますよ、てな具合です。たとえば、「ふかんど」に対して、私はたくさんの考えがあります。んでえ、その中の一つに、ふっと、こういう考えが浮んだことがあるような感じ。

こんな考えが、強く全面的に出ちゃって、しょっちゅう、しかも真剣に考えていたらぁ、会員の人は、気持わるがって逃げちゃうか、正気を疑って遠のきます。

話は変りますが、私が日記をつけ始めてから、もう十七年になりました。「開拓」と名前をつけました。十九才でした。そのきっかけは、シートンです。シートンというと、ふつうは動物記が有名です。勿論、私は動物記も読みましたが、それよりも、深い感銘を覚えたのは、彼の自叙伝や、インディアンに関する記録、草原の伝説、カナダ地方について書かれたものでした。

シートンが、自分の日記について、ちょっと書いていました。簡単に、少しです。どういうわけか、それを読んだ時、「よしっ、じゃあこのオレも……」というのが、そもそものきっかけです。今、八十三さつ目です。売ってる日記帳は使いません。あんな固くて立派なもの、使いずらくて持ち運びに不便です。そこへいくとノートは、たたもうと曲げようと自由。野外では、ウチワの代りや、ナベシキにもなる。何かをページに貼るのも自由。思ったことを、ノートがない時、マッチに書き、あるいは新聞記事をビリ〱やぶき、あるいはチラシの裏に、トイレットペーパーに、タバコに、手あたり次第どんな紙っ切れにでも忘れないうちに書いておき、それをそのまんま、後でノートにくっつけておけばいいのです。落ちついて、机に座ってでもなければ書けないなんて、それはいいけど、私はそんな上品な人間じゃないから、続かないな。ゼイタクだ。三日坊主でも結構だ。途切れても、三日坊主をしょっちゅうやればいいと思う。ええ、何も書く事がないって、そんなら、〇月×日、「何も書く事はない」って書けばいい。そんな日もあっていいんだ。だから、元気を出せ。

大丈夫です。「ふかんど」を、そんなふうに作ろうとは思っていませんから。心配しないで下さい。乞食になってもなんて驚かしてすみません。何しろ、私は、会長ですから！

お振込は千葉銀行012−54253
谷津干潟愛護研究会

全国からのお知らせ

参考までに。ここでは、こういう事をやってます、そんな具合に読んでおいて下さい。その一つの例として紹介しました。どうぞ。

ところで、船橋や習志野の皆さん、もう少しどうにかなりませんかねえーーー。

特集☆失われた海岸を取戻すたたかい（I）

釣り場造らせた四日市入浜権を取り戻す会

――記念の釣り大会に三〇〇人が参加――

四日市入浜権を取り戻す会は石油コンビナートに奪われた海岸を取り戻すため、昭和五十二年から毎年コンビナートの運河で釣り大会や水泳大会を開催、行政や企業に要求して来たが、このほど四日市港管理組合が同会の要望に応じて四日市市霞に全長百二十メートルの釣り突堤を造成した。転落防止用のコンクリート壁や非常用階段、救命浮輪もあり、市民の安全な釣り場となっている。

入浜権を取り戻す会はこれを記念して、十月二十五日、同釣り場で釣り大会を開いた。大会には小学生から老人までの約三百人が参加、セイゴ、ボラ、ハゼなどの獲物に歓声をあげた。兵庫県高砂市でも関西電力が一昨年一月、三億二千万円かけて釣り場を造成するなど、奪われた海岸を取り戻す運動は各地で少しずつ成果を見はじめているが、私たちはそれで満足しているのではない。

釣り人でにぎわう魚釣り場　（三浦靖弘氏撮影）

‥本当の海を取り戻すまでは‥

同会の樋口吉一会長は次のように言っている。「野鳥が飛び、市民が釣りや潮干狩りを楽しめるのが本来の海の姿だ。釣り突堤ができて釣り人も増えたが本当の意味で海が市民の憩いの場になるまで運動を続けていく（中日新聞の記事より）」　そのような海はまた当然、砂浜や藻場があり、魚などのあらゆる生きものが育ち、漁業者が生活できる海でなければならない。四日市の会の人たちはそうした点でも成果をあげていることを強調したい。

四日市には高松海岸というまだ自然のままのすばらしい浜辺がある。同会ではここをなんとか残そうとネプチューン計画（買取り保存）の候補地に名のりをあげることも考え、その他さまざまの努力を重ねてきた。このほど同会の樋口会長からとどいたお便りによれば、昨年も高松海岸で元日の水泳大会、探鳥会、写生大会などを行ったが運動の結果埋立てが中止となり、管理組合の一〇ヵ年計画の中で自然を残して公園化することになったという。三浦前会長、樋口現会長をはじめ同会の会員諸氏のたゆまぬ努力のたまものとして、今回の釣り場とともに、いやそれ以上に、声を大にして報告する。

ちなみに、三浦前会長は一昨年来病気療養のため会長をしりぞいていられるが、最近ほとんど本復され活動し始ていられることをお伝えする。

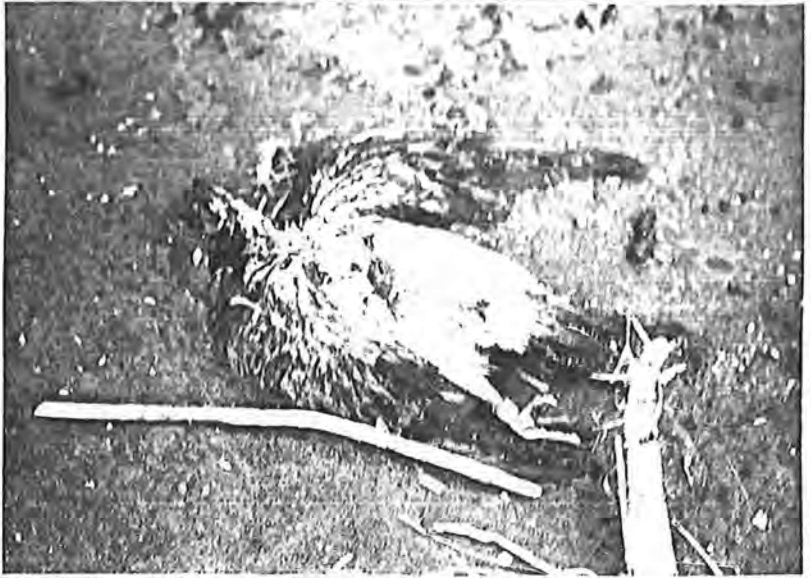
※連絡先

三重県四日市市相生町一―七
三浦様方
四日市入浜権を取り戻す会
電話〇五九三―五三―三三二七

干潟の片すみに

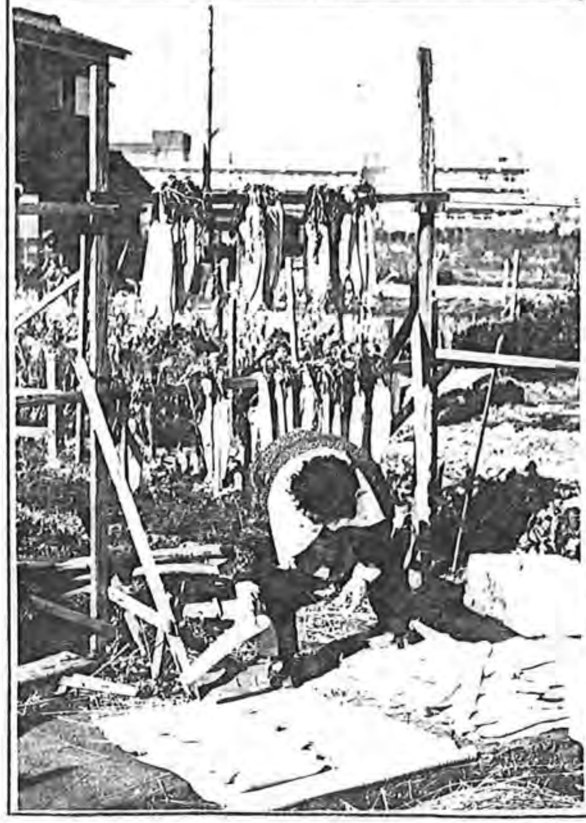
足輪をつけています。どうやらハトらしいです。

つめたい北風にさらされた、アシ原の水の中にありました。いろんな種類の鳥が、こういう姿で時々見つかります。力つきたのでしょうか、他の鳥の為でしょうか。



冬の日差しを浴びて

母が畑で大根を乾している。とっても天気はいいのですが、これ又、とっても空気がつめたい日でした。干潟に出かけようとした時、ちょっとカメラに収めました。



北風の吹く埋め立て地を行く

ふかんど

第130号

1982.1.8

谷津干潟愛護研究会
〒272 市川市本北方二～三五～六
電話〇四七三－三八－六六六八

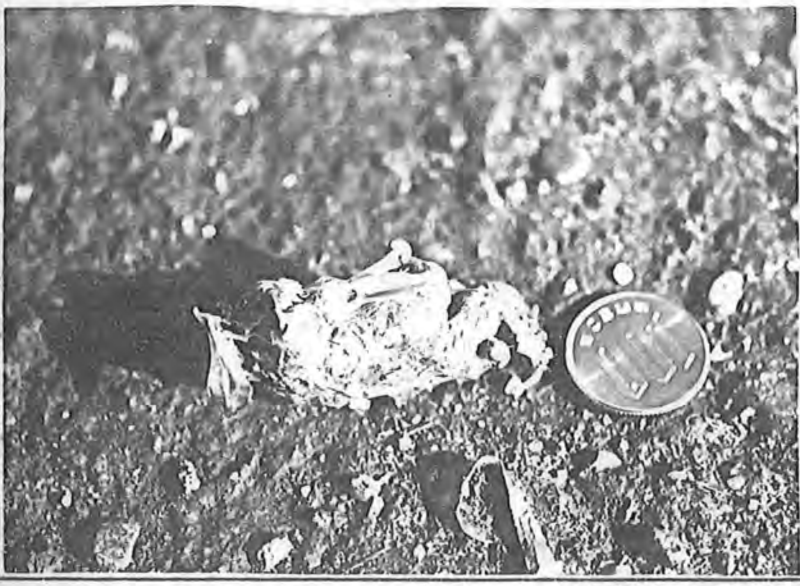
文責 森田三郎

会費年2000

創刊 1980.6.3

冷たい風が吹きすさぶ、砂漠の如き、人っ子一人いない荒涼たる埋め立て地。使い捨てられた杭のそばを砂が走ってゆくのです。

コミミズクのペリットです。冬にシベリアからこの京葉港の草原に来て、ノネズミを食べる。消化しない骨と毛を丸めて出す。

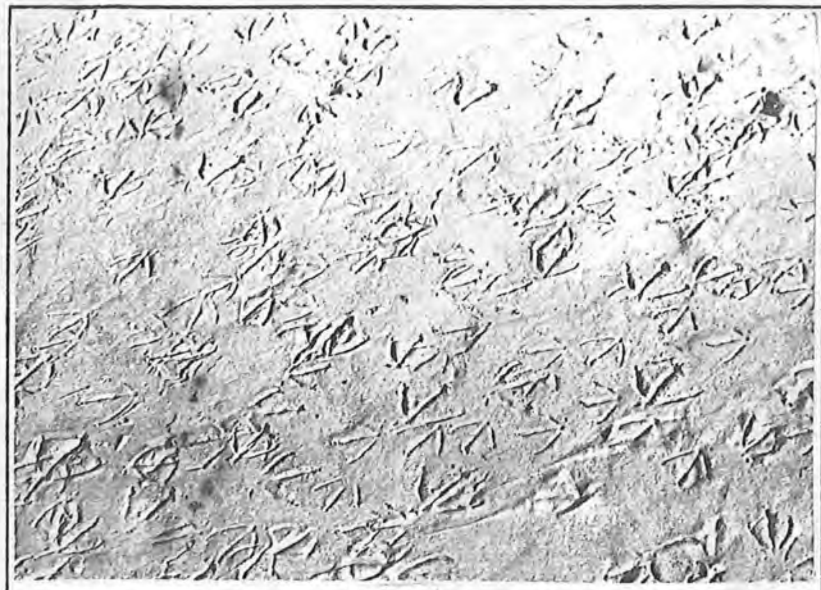


埋め立て地からの〝便り〟をお届けします。数年の後には、ここをコンクリートやアスファルトの下になってしまいます。

私は、そっとその姿を伝えたいと思います。今は冷たく澄んだ、寒い〱冬。しかし、夏には、同じここが炎熱の地獄と化すのです。

貝の化石を見かけます。植物は、初めに塩気に強いものが生え、やがて年を追って、内陸性のものが勢力をのしていきます。

そう四ヶ月もしたら、又、あの〝埋め立て地の花〟、コアジサシが南のニューギニアの方からやって来て、ここでヒナをかえします。でも、数年後には、コロニーは全滅します。



鳥の足アトです。シギとチドリと、カモのがあります。水たまりのそばで、砂は湿っていました。立っているとめり込む。

まわりをサラ〱した砂に囲まれた、静かな水たまりのほとり。左側が水面。右側の砂は、水が引いたその跡の形です。

お振込は千葉銀行012—54253
谷津干潟愛護研究会

〝夜の忍者〟

コミミズクを撮影している人がいます

皆さんが、あったかぁーいコタツの中に入って、ホカ〱と湯気の出る夕ごはんを召し上がりながら、テレビを見たりお話しをしている頃。それと丁度同じ頃に、暗い寒空の下なる、埋め立て地の草原で、時にはじっと、時にはもぞ〱動きまわって、渡り鳥の撮影をしている人がいます。

「ヨウ、コーヒーが出来たよ、ホラァ飲みなよぉーっ」。「うん、ありがとう」。ズズーーッ、ハッアーーー。「いいなあ、うんめえなあーーー」。「ところでえ、コミミは来てくれんかねえーーー」。「ううーーん、今まで何回もこうやってるけどお、まだ一回も成功してないんだぁ」。「奥さん、ブー〱言わない？」。「あきらめてるもんーーー」。「ヘエー、じゃなくっちゃなあーーー」。

目だけは、カメラをセットした辺りを中心に、車の中から常にまわりを注意して見まわしています。

黒い影が、フワ〱と、あるいは、スーッと流れる如く素早く動く。来たのです、コミミズクです。翼を広げると、一メートルに達するのもあります。しかし、中々カメラの所には来てくれないとのこと。いつも、〝空振り〟で帰って行くと聞きました。

藤富さん、五十嵐さん、石川さん、この三人の方が根気よく通い、ねらい続けています。皆千葉県外の人です。仕事が終ってから来るのです。三人とも、埋め立て地や干潟をよく知っている人ばかりです。それもズバ抜けて。私は三人とも、この京葉港で知り合いました。

この人達、別に、どこかに出そうとか、何かに使おうなんて、全く眼中においてないのです。頼まれたわけでもありません。〝自分は好きなんだ、オレはやりたいんだ〟。これが、彼らの埋め立て地のすべて。

励ましのお手紙

森田さんの、いつもの精力的な活動には、敬服致しております。とかく、野鳥の会とか、自然保護団体と称するやからは、頭を使って、理屈をこねたがります。しかし、自然を愛し、彼ら生物を、護るのには、理屈や、学問はいりません。感動する[illegible]き心と、情熱と、体力があれば良いと思っています。今年は、そういうことを、ポチポチと、訴えていこうと思っています。

この人、察するにお年は私よりずっと上かと思われます。親子ぐらいの違いがあるのでしょう。

他のところに書いたとのを読みましたが、私は〝サンマの開き〟になるほかないと思いました。だから、お手紙、ありがとう。

谷津七丁目、中村統治さんから。

ふかんど

第131号

1982.1.9

谷津干潟愛護研究会
〒272 市川市本北方二〜三五〜六
電話〇四七三−三八−六六六八
文責 森田三郎

会費年2000

創刊 1980.6.3

谷津干潟通信箱〜みんなの声〜

やつひがたには鳥(カモ)とか魚がいるんだ
からゴミとかをすてないでほしい
今日空をみたらとりのたいぐんが100
ぴきかぐらいとんでいましたぼく
はやつひがたにゴミをすてるとカモと
かがたいへんだなあ
みんなぼくのクラスの人とかしって
いる人にはやつひがたにゴミをす
てないようにしてほしい

55年1月9日土ようび
ならしのしそでがうら~~一ナ二九ー1~~
1ノ二九ノーマープルつだぬまAと804
号くろさわかずひろ

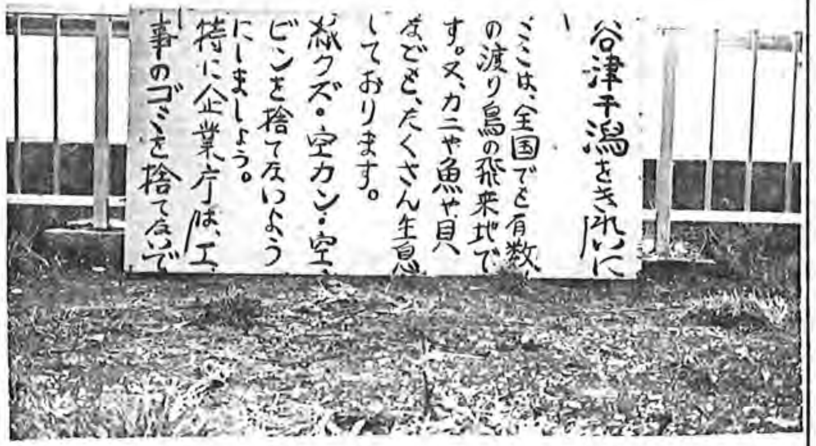
「おじさぁーん、ゴミ捨てちゃぁ、カニや魚が大変だよねえー、んでさぁ、ぼくう拾ってんだぁ。ふんでさぁ、来んときにぃきれいにしてやんだぁ」。

そんな子供がいました。二人連れ。それとなく見ていると、ゴミを拾っていました。素手で、小さな手で。だから、少しの、私にすれば、ひと握りのものでした。ゴミ入れを下さい、とか、どこに入れるの?、なんて聞いて来た。「あすこの白いドラムカンだ」と、スコップで指した。かけて行った。

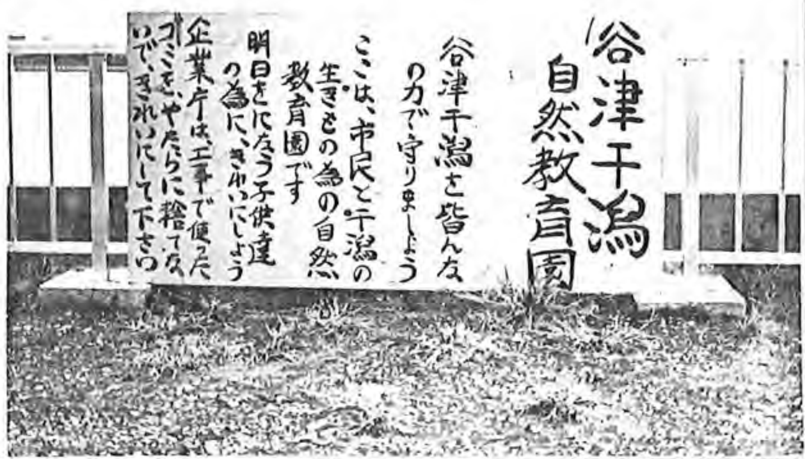
私が黙々と砂っすくっていると、何回も話しかけて来る。干潟に来るのが好きで、草ムラ、クローネの小屋、水上観察舎が気に入っていて、ここが楽しいなんて話すのでした。

右の通信、この子のもの。イッショケンメイ書いたのでしょう、私もイッショケンメイ読みました。この日あった、いい事でした。

また作りました（12.5）


谷津干潟をきれいに
ここは、全国でも有数の渡り鳥の飛来地です。又、カニや魚や貝などがたくさん生息しております。
紙クズ・空カン・空ビンを捨てないようにしましょう。
特に企業庁は、工事のゴミを捨てないで

誰か、もっと上手な字で書いてくれる人、いませんか。企業庁の職員は言った、「森田さんの字はすぐわかるんですよ－－でも、余りうまくないですね」と。すると、そばにいた管理課長、「おい、本人の前で変なことを言うなよ！」、なんてことがありました。それを想い出です。


谷津干潟自然教育園
谷津干潟を皆んなの力で守りましょう
ここは、市民と干潟の生きもの為の自然教育園です
明日をになう子供達の為に、きれいにしよう
企業庁は、工事で使ったゴミを、やたらに捨てないで、きれいにして下さい

ある日のフィールドワーク

『いそしぎ』とパンのミミ

× × × × ×

「森田さぁーん、これえー、これを谷津干潟の小鳥ちゃんにい、やってくださぁーい、少しでわるいけどぉ」。そう言って、ママさんがパンのミミをくれるんです。

「わあーっ、すごいなあ、いいんですかあ、こんなにいっぱい、オイシソウですねえ、ありがとうございまあーすう、ホントウニいつもすみませんねえ」。そうお礼を言って、ほほえみながらもらっております。

パンのミミって――、結構うんまいんですよぉそれえ。よく噛んでみたらいい。徹底的に。口の中で、ミミがドロ〳〵になるまで噛んで、飲む如く食べるんです。干潟や埋め立て地で、ごはんを食べはぐった時、食べちゃいました。でも、何だか、鳥にやるぶんをハシケルような気分がするんですねえ。しかし、まあ、鳥に代っておれをしているんですから。

（資　料）

81.4.22日 読売

谷津干潟のゴミ処理で反目

投棄反省求め陳列 愛護団体

危険だし目ざわり 地元住民

習志野市の谷津干潟（ひがた）のゴミ処理をめぐって、二十一日、干潟の保護団体「谷津干潟愛護研究会」＝森田三郎会長(三五)＝と付近住民が対立し、習志野署員が間に割って入る騒ぎに発展した。同研究会が環境悪化の実態を知ってもらおうと、集めたゴミを護岸や道路に〝陳列〟したためで、住民は「危険だし、目ざわり」と反発。住民がゴミを干潟側に戻せば、同研究会が再び護岸に積み上げるなどゴミの〝キャッチボール〟。同市役所も板ばさみにあって、ゴミを処理しようにもできにくいとかで、半ばサジを投げた格好。干潟の野鳥たち、このトラブル、どう見る――。

同研究会では、これまで集めたゴミを土のうに詰め込み、協力業者に処理してもらっていたが、干潟が汚れていることをPRすべきだとの声が上がり、この〝陳列作戦〟に出た。

この日も、森田会長のほか、主婦五人が午前中、一時間半ほどゴミを拾い、護岸や道路に積み上げた。ところが、ゴミを集積した付近には民家や食堂があり、「護岸では人が座ったりするのに、とんでもない」と森田会長にクレームをつけ、押し問答となった。

住民の一人、食堂経営熱田睦子さん(四〇)は「一週間近く、じっと我慢したんですよ。そこで市役所にゴミを処理してくれるようにいっても、ゴミに混じっているコンクリート片などは、産業廃棄物なので県庁の担当、とタライ回しされたんですから」。

住民の話では、幼児がこのガラス片でけがをしたそうで、「人間と鳥のどちらが大事なんだ」と息まく始末だ。

こんな事もありました。そうじしている、私達の目の前で捨てていくのです。「捨てないよう、お願いすると、「お前に何の権限がある」。「私達は地元住民だ、ヨソ者にとやかく言われるスジ合いはない」。「埋めたり、燃やせばいいだろう」と言われた。

『フローネの小屋』というところ

ふかんど

才132号
1982.1.10
谷津干潟愛護研究会
〒272 市川市本北方二ー二五ー六
電話（〇四七三）ー三八ー六六六八
文責 森田三郎
会費年2000
創刊 1980.6.3

「谷津干潟ボランティア活動」の基地なのです

毎週日曜日、あるいは休日に、皆んなが集って来るからです。勿論、〝何かをやる為〟にです。来られる人が、来るのです。来ることや、やることなどを、決めておくこともあるし、決めないこともある。皆んなが、自分のやりたいことをやっています。来る時間や帰る時間を、決めることもあるし、そうでないことの方が多い。まぁ、ひと言で言うと、アメーバーみたいなボランティア活動。

たとえば、こんな事をしています。

- 「フローネの小屋」の手入れ
- クリーン作戦（毎月才三日曜日）
- ペンキ塗り
- 通信箱の点険
- 看板づくり
- ゴミのそうじ
- ゴミを燃やして、カスを袋に入れる
- テーブルやベンチの修理
- カニ、魚、渡り鳥の観察と調査
- 図カンや望遠鏡を草ムラに置いて、誰でも自由に使えるようにしておく
- あらゆるものに対して、説明を求める人に話をする
- 干潟の環境改善作業
- 干潟や埋め立て地に、生息ならびに繁殖している渡り鳥を中心とした、写真撮影や現地案内による実物教育

ーーー以上、無理矢理言葉にすると、こんなようなこと。

その日で終るものもあれば、半年がかり、又、環境美化のように、いつまでも続くものもあります。そうした中でも、人それぞれに、得手不得手、好き嫌い、そーていろんな都合もあるので、必要な時は相談したり連絡し合っております。意見や情報交換、雑談などを、ごはんを食べたり寝っころがったり座ったりしてやっています。草ムラやベンチで、コーヒーやお茶を飲みます。春になると、若草の中で、ヒバリや小鳥の声を聞きながら、バーベキュー、スキヤキなどをやります。付近の市民の方も入るし、差し入れもあり、今から待ちどおしい、楽しいものです。

望遠鏡と図鑑を買う事になりました

× × × ×

多勢の市民が来ます。今まで、個人のものを使ってもらっていました。でも、圧倒的に不足しています。そこで、会員有志がお金を出し合うことに決りました。テーブルの上に置いて、市民の用にあてます。「ご自由にお使い下さい」との説明板も作ります。五〜六台設置して、役立たせたいのです。

（1981年12月30日 於・忘年会の席で）

おわび、クローネではなく、フローネらしい。

お振込は千葉銀行012ー54253
谷津干潟愛護研究会

谷津干潟も、生きものです！

谷津干潟を
自然教育園にしよう

谷津干潟は、"生きた教科書"です。四季おり〱にくり広げる、生きもの達による「干潟のページェント」は、他の何ものにもまさる実物教育です。

たとえば、子供達に、「生きもの達をかわいがりなさい」とか、「命あるものを大事にしなさい」と、何百回教えることよりも、言うことよりも、その子供に、彼が好きな、あるいは気に入った生きものを与え、そして飼わしてみるのです。相手は、言うまでもなく"生きもの"です。それ自身の生き方があります。生命あるものとしての、生体のしくみがあります。彼、あるいは彼女の自由にはなりません。手間をかかるでしょう。面倒くさくって、自分が振りまわされてしまうことに、時にはいまいましさを感じるでしょう。意のまゝにならない為、憎らしくもなるでしょう。

それでいいのです。かわいい〱だけでは、大事にしようと思うだけでは、生きてはいけないこと、それだけではすまされないことを身をもって知らされるのだから。

谷津干潟通信箱～みんなの声～

1月10日　日曜日

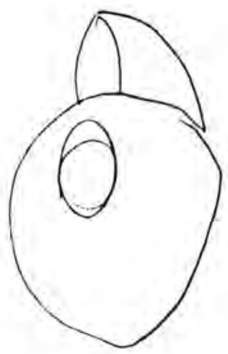
かぜがつよい時かこいがあるとかんさつしやすい。
鳥が10mむこうにいる。　水がすこしいつもより多い
前に見える、ドラムかんの向こう側に鳥がいっぱいいる。
観さつしていて鳥の名前がわかるとうれしい。

少しメがゆるいで
たし小形な鳥

白い小さなとり →
すこしふとって
茶色のとり →

できるといいなあ

著者　新浦西小学校　科学クラブ
6ノ1　留島
6ノ4　小林
じ…



1月10日日曜日
がぜがつよい時かこけがあるとかん
さつしやすいの

らくがきです。
(ぼくたちじゃない)

できるといいなあ

うえの、小原、田島です
小さい子供が
いたずらがき
をはした

ふかんど

第133号

1982.1.12

谷津干潟愛護研究会
〒272 市川市本北方二～三五～六
電話（〇四七三）一三八一六六六八
文責 森田三郎

会費年2000

創刊 1980.6.3

心の"地下水"

想像力は、創造力である。

熱望する力、"夢みる力"こそ、心身の、躍動する精力の源である。

だがしかし、それは、我々の身辺にあまた存在する、少々の困難や障害によってかき消されるものでもなければ、崩れるものでもない。人間の心の奥深く、奥へ〱と沈み、刻まれたもの、すなわち、全身の血や肉となりて行き渡ったものである。

そしてそれは、当の、本人すら知らない。意識を、自覚すらない。彼は知らない、それが何であるかを。又知らない。何故想い、何故考え、その為すところの理由を。その力のよって来たるところを知らないのである。

彼は、他の人と相並びて、同一の場、事物にのぞみても、その力ゆえ、その視るところ、引き寄せるものが違うのである。そこにて、ひとたび知見したもの、ことごとくが彼にあっては、心象を築く核と成る。

あり〱と、生き〱と、描けば描く程、彼の心の内なるダイナモは、躍動し、うなりを上げて回転する。そして、力と熱を帯びた、「ある約」がめばゆるのである。力と熱と、"孤独と静寂"をとって、その根底と成すものであることを、彼は識っている。彼は信じている。凡そ、燃ゆるが如き熱望する力こそ、全ての能力開発の、フロンティアであると。

読売新聞 1982.1.12

あした海

変わる東京湾の港図

<7>

海ガメと遊んだ楽園……

ゴミと汚水の中で かすかに息づく命

すっかり埋め尽くされた一角にポツンと取り残されたような空間。習志野市の谷津遊歩道と湾岸道路にはさまれて、わずかばかりの自然が息づいている。冬鳥が羽根を休め、全国でも五指に数えられる野鳥の楽園。しかし、谷津干潟に昔の面影はない。

森田三郎さん（三七）は毎朝九時過ぎ、干潟に姿を見せる。潟をひと回りし、周囲の空き地や潟の中に捨てられたゴミを片づけ、案内板を整える。

この地に生まれ育ち、干潟を守ろうと、干潟へ帰ってきた。谷津干潟愛護研究会の会長。

「八年前、新聞で野鳥の楽園が危ないという記事を読んで、子供のころの干潟を思い浮かべて決意したんです。魚やカニが一匹でも多く住める干潟に戻そうってね」。一人で会を作ったのは三年後だった。

干潟のうた

富津岬から始まって、木更津、千葉、船橋、品川、羽田沖を経て、横浜・本牧まで、東京湾は水深五㍍以下の浅い州が続いていた。海水の出入りが少ない内湾は、大小の河川から土砂が流れ込んで海岸に堆（たい）積、潮の干満で平らな干潟が形成された。

谷津干潟では、「ふかんど」と呼ばれた深みにトビウオが飛び、大きな海ガメが泳ぎ着いた。クジラやイルカが打ち上げられ、森田少年は、にぎりめしを持って、よく見物に出かけた。干潟に注ぐ小川をシラスウナギがそ上し、森田少年ら子供たちは「ソーメンすくい」と言って、シラスウナギ取りを楽しんだ。潮が引けば、竹馬で遊べる広場になり、周囲のヨシの原には、タヌキの姿も——。

こうした浅場が、開発する側から、格好の埋め立て地と見られた。四十年代、干潟や州はどんどん埋め立てられていった。

谷津干潟もその例外ではなかったが、たまたま戦争中、利根川とを結ぶ水路建設の予定地として国有地になっていた約五十㌶だけが埋め立てを免れ、偶然にも残されることになった。すでに、海は遠い先になって、ここからはもう望めない。

そのわずかな自然のあちこちにも建築廃材や家庭ゴミが投げ捨てられ、生活排水が流れ込む。「せめて国設の鳥獣保護区に指定して欲しい」と、サラリーマン、中小企業主から教員までざっと三十人の会員たちが、手弁当で月二回のクリーン作戦や周辺にベンチを置いたり、野鳥の案内板を立てたりするなどの活動を続けている。

「トビウオが飛び、海ガメがやってきた」と話す森田さん

「なんのために毎日ここへ来てこんなことをやってんのかなって自分でも考える。でも、子供のころ遊んだ干潟がこんなになっちゃった。だから、少なくともここだけは守り通すことに自分の存在感を見いだしたいんです」

東洋大文学部学生の時から十七年間勤めた市川市内の新聞販売店を昨年秋辞めた。「配達やら集金やらで干潟に来る時間がないから……」と、当分は月十二万一千円の失業保険でガマンする。

森田さんが昨年夏、干潟に立てたペンキ塗りの看板がある。

× ×

——幾千のシギ、チドリがせまい谷津干潟の上を飛びまわる。夕陽を受けて紙吹雪のようだった。

追われ追われてかれらは、このせまい所に押しこめられた。生きながら埋め立てられた幾千万の東京湾の生きものたちへの鎮魂歌——。

いそしぎで、新たのつき合い　パンのミミ　　　ひとまず一首

「パンのミミ」の想い出

「パンのミミ」を見たり、その言葉を聞くと、オレは、甘くなつかしい、そして、チョッピリお礼というか、感謝めいた感じがこみ上げてくる。

谷津干潟から14号線に出て、船橋方面へ行くと、「ユアサフナショク」というパンを作っている会社がある。店を出している。子供の頃、よくパンを買いに行った。が、パンはパンでも、「くずパン」というやつだ。どんなやつかと言うと、作りそこねたもの、形が変なもの、そしてここに出ている「ミミ」だ。だから、安くていっぱいあるっていうわけ。オヤツみたいなもの。

海や野原、小川などに遊びに行く時にはよく買ったものだ。ミミが一番安くて、一番量があった。それを持っていって、海や野原でムシャ〱喰うのだ。うまい、とにかくうまかった。つまり、まあ、うまくなってしまうくらい腹がへっているのだ。どうしようもなく腹がへる程、遊ぶからである。遊ぶことの量とはげしさは、今の子供の比ではない。じっさい、腹がへって目ないを感じたり、透明な気分、心がフワ〱となる感じが何度もあった。腹がへると、ホントウに、ものがよく見え、音がよく聞えるっていうこと、何度も体験したよ。誤解しないでほしい、三度の食事はチャンと食べていましたから。―家の名誉を傷つけない為に―

ノドのかわきぐあいもそれと同じくらい。歩きながら、ツバを飲み直してガマンした。泉で水を腹一杯飲むから、腹がポコンとふくれ、歩くと〝ケポッ〱〟と音がした。空腹ゆえ、水なしでも、ノドがかわいていても、ミミを食べるのに、ノドに通りが悪いなんてことはなかった。それ程大切な「ミミ」だから、店にない時は、そばで、一人でメンコやベエゴマをして工場から来るのを待った。時々店の人が心配して、工場へ取りに行ってくれた。

励ましのお手紙

°谷津に住みながら、
干潟の清掃に手伝いにも行かず
申し訳なく思っております。
[illegible]と、こんな文句が浮かび
ましたので、(つたない語句かも
しれませんが)
送らせて頂きます。

「"Clean the Earth"
地球をきれいにしよう！
まず、谷津干潟をきれいに！」

寒くなりますが、お身体に
御留意下さい！
'81.12.3.

とにかく、こういう文章の手紙がいちばんうれしい。どこそこの会としてはとか、会員とか、組織としてはとかいうのが、自然保護運動の活力、エネルギーを減殺する方向に進んでいるのが県下の実情だけに。

習志野市谷津七丁目　中村統治 さんから

谷津干潟の鳥の情報

1981 12/30

チドリ科
ハジロコチドリ
コチドリ
イカルチドリ
シロチドリ —— 366
メダイチドリ
オオメダイチドリ
オオチドリ
コバシチドリ
ムナグロ
ダイゼン —— 118
ケリ
タゲリ

シギ科
キョウジョシギ
トウネン
ヒバリシギ
オジロトウネン
ヒメウズラシギ
アメリカウズラシギ
ウズラシギ
ハマシギ —— 1743
サルハマシギ
コオバシギ —— 1
オバシギ —— 1
ミユビシギ
ヘラシギ
エリマキシギ
コモンシギ
キリアイ
オオハシシギ
シベリアオオハシシギ
ツルシギ
アカアシシギ
コアオアシシギ
アオアシシギ
オオキアシシギ
カラフトアオアシシギ
クサシギ
タカブシギ
メリケンキアシシギ
キアシシギ
イソシギ
ソリハシシギ
オグロシギ
オオソリハシシギ —— 1(夏)
ダイシャクシギ —— 5
ホウロクシギ
シロハラチュウシャクシギ
チュウシャクシギ
ハリモモチュウシャク
コシャクシギ
ヤマシギ
アマミヤマシギ
タシギ
ハリオシギ
チュウジシギ
オオジシギ
アオシギ
コシギ

セイタカシギ科
セイタカシギ
ソリハシセイタカシギ

ヒレアシシギ科
ハイイロヒレアシシギ
アカエリヒレアシシギ

ツバメチドリ科
ツバメチドリ

タマシギ科
タマシギ

ミヤコドリ科
ミヤコドリ

カイツブリ科
カイツブリ
ハジロカイツブリ
ミミカイツブリ
アカエリカイツブリ
カンムリカイツブリ

ハタオリドリ科
ニュウナイスズメ
スズメ

ガンカモ科
コブハクチョウ
オオハクチョウ
コハクチョウ
リュウキュウガモ
アカツクシガモ
ツクシガモ
カンムリツクシガモ
オシドリ
マガモ
カルガモ —— 93
コガモ —— 983
トモエガモ
ヨシガモ
オカヨシガモ
ヒドリガモ —— 437
アメリカヒドリ
オナガガモ —— 787
シマアジ
ハシビロガモ —— 134
アカハシハジロ
ホシハジロ
オオホシハジロ
メジロガモ
アカハジロ
キンクロハジロ
スズガモ
コケワタガモ
ケワタガモ
クロガモ
ビロードキンクロ
アラナミキンクロ
シノリガモ
コオリガモ
ホオジロガモ
ヒメハジロ
ミコアイサ
ウミアイサ
カワアイサ

カモメ科
ユリカモメ
セグロカモメ
オオセグロカモメ
ワシカモメ
シロカモメ
カモメ
ウミネコ
ズグロカモメ
クビワカモメ
ミツユビカモメ
ゾウゲカモメ
ハジロクロハラアジサシ
クロハラアジサシ
ハシグロクロハラアジサシ
オニアジサシ
オオアジサシ
ハシブトアジサシ
アジサシ
ベニアジサシ
エリグロアジサシ
コシジロアジサシ
ナンヨウマミジロアジサシ
マミジロアジサシ
セグロアジサシ
コアジサシ
ハイイロアジサシ
クロアジサシ
ヒメクロアジサシ
シロアジサシ

クイナ科
クイナ
オオクイナ
ヒメクイナ
ヒクイナ
シマクイナ
マミジロクイナ
シロハラクイナ
バン
ツルクイナ
オオバン

サギ科
ゴイサギ
ハシブトゴイ
ササゴイ
アカガシラサギ
アマサギ
ダイサギ —— 6
チュウサギ
コサギ —— 1
カラシラサギ
クロサギ
アオサギ —— 21

ワシタカ科
ミサゴ
トビ
ハイイロチュウヒ
マダラチュウヒ
チュウヒ —— 1

ハヤブサ科
シロハヤブサ
ハヤブサ
チゴハヤブサ
コチョウゲンボウ
チョウゲンボウ

フクロウ科
トラフズク
コミミズク —— 1

ヒバリ科
ヒバリ
ハマヒバリ

ツバメ科
ショウドウツバメ
ツバメ

アトリ科
アトリ
カワラヒワ
マヒワ

ヒヨドリ科
シロガシラ
ヒヨドリ

モズ科
チゴモズ
モズ

セキレイ科
キセキレイ
ハクセキレイ
セグロセキレイ
マミジロタヒバリ
コマミジロタヒバリ
ヨーロッパビンズイ
ビンズイ
セジロタヒバリ
ムネアカタヒバリ
タヒバリ

ホオジロ科
シベリアジュリン
オオジュリン
ホオジロ
コジュリン

ヒタキ科☆ツグミ亜科
ジョウビタキ
ノビタキ
ウグイス
コヨシキリ
オオヨシキリ
ツグミ —— 1
セッカ —— 1

ムクドリ科
ムクドリ

カラス科
ハシボソガラス —— 1
ハシブトカラス —— 2

タヒバリ —— 1

企業庁は約束を守っていません。注意しましょう！

ふかんど

第134号

1982.1.14

谷津干潟愛護研究会
〒272 市川市本北方二〜三五〜六
電話〇四七三—三八—六六六八
文責 森田三郎

会費年2000

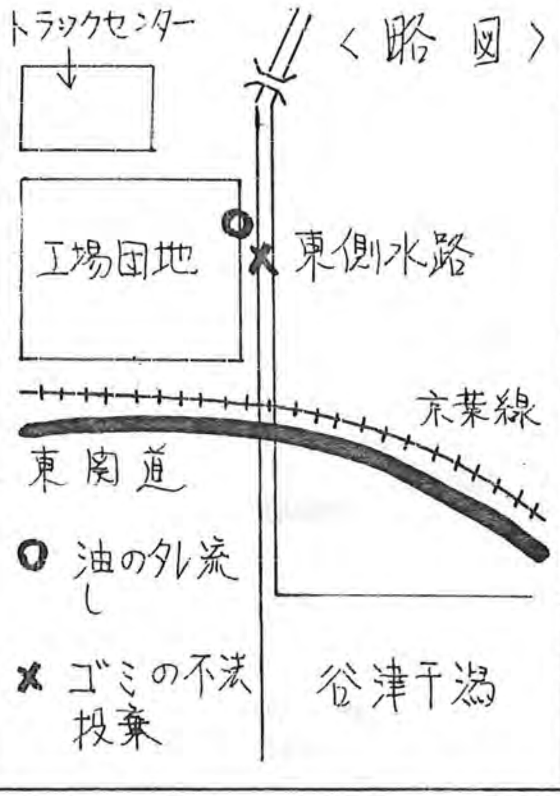
創刊 1980.6.3

廃油のタレ流し現場を確認しました。

一月十二日(火)、午後十二時五分。場所は習志野市茜浜、工場団地のすぐ横の水路に流されていた。確認は森田。企業庁の「水路には、雨水の他、一切出しません」という協定は破られました。尚、これらの物は証拠物件として届ける事、了解済みです。

油のタレ流しの現場

水路のすぐそばに、不法投棄のゴミの山
向うの建物は、習志野トラックセンター



お振込は千葉銀行012—54253
谷津干潟愛護研究会

(No

S.56.1.14

干潟のところどころにゴミがおちている。が、私たちの努力1つで、干潟が少しでもキレイになるのだから、ゴミをすてる人たちにも、もう少し気をつけてもらいたい。

稲員

谷津干潟通信箱～みんなの声～

1982年 1月 15日 (金) 晴　　矢崎

はじめて来ました。

鳥がいたけど。ぼうえんきょうがなかった。

でも、いろいろな鳥のうごきが少しは わかりました。どういうとりがいるのか、よくわからなかったけれど、今日来てみたら、わかりました。

ちょこちょこ歩いてとてもかわいかった

「谷津干潟が心配だったの」

そう、自転車に乗ったセーラー服の中学生が言うのでした。

一月十四日の日沈時、干潟と草原と空を、夕日でみんな赤かった。大気はグン〱冷えて来ていた。私も、もう今日はこれで帰ろう、とそう思っていた時だった。

干潟の環境改善の為に、干潟に砂をスコップで入れ、干潟を作っていた。

秋津の方から、あたりを見ながらゆっくりと、その女子中学生はこちら、自然緑地の草ムラにやって来た。私は鳥の情報板の所にいた。フローネの小屋やベンチの所、そして、私のまわりを行ったり来たりしていた。自転車を降りて、干潟の中をのぞき込んだり、まわりの景色、遠くにいる鳥の群の方などを見るのだった。小屋の中へ入ったり、通信箱の帳面を読むのであった。

何だろう？、そう思った私は、「どうしたんですか、何かあったんですか？――」と聞いてみた。そしたら、こう言うのであった。「ふんとねえ、町の人がねえ、谷津干潟がつぶされるっていうの言ってるの聞いたの――。んでねえ、私ねえ、ずっと前から干潟が好きだったのお――、だからぁ時々こういうとこおいいなあと思って来てたんですう、んでねえ、心配だったからあよく見ておこうと思ってえ」。「――そう」。

干潟の生き物達と相対する時、その間に、組織のエゴや理屈の座る〝席〟はない。

ふかんど

第135号

1982.1.15

谷津干潟愛護研究会
〒272 市川市本北方二〜三五〜六
電話 〇四七三ー三八ー六六六八
文責 森田三郎

会費年2000

創刊 1980.6.3

原点とお「カド」が違います

県支部を辞めた理由

昨年七月。私達は、千葉の干潟を守る会（大浜清代表）・千葉県野鳥の会（石川敏雄会長）と協力、連名にて、干潟の環境保全に関するお願いを、道路公団と鉄道建設公団にしました。水の流れを良くする為の水路の清掃と掘削、工事使用物やゴミの引き上げ、その他良好にする為の事。三者とも何回と工事現場に入って、歩いて見守りました。そして、両公団は約束を実行してくれました。その為、水の流れも良くなり、干潟に魚も多数入って来ました。その事を、県支部でも中心的な存在である某幹事にお話したら、こう言われました。「森田さん達が、大浜さんや石川さん達とこれからも何かをいっしょにやると、日本野鳥の会本部や私達（県支部）と、これから差し障りが出るよーーー」と。意見としてはあってもいいと思う。が、県支部は干潟の環境保善の為に、何程の事をやっているでしょうか？。残念ですが事実は否です。しかし、大浜氏石川氏は長年やってきたし、今もやっています。認めない事は、誰でも不可能です。他にもいくつか理由が有りますが、私は今までの経過を考え、この際、身を引こうと思いました。

谷津干潟通信箱 〜みんなの声〜

S.57. 1.15（金）

汚染された東京湾にも このような場所が残っていたこと を知って 本当に嬉しくなりました。

森田さん達の ご努力で ぜひとも ここを守って ほしいと 思います。

浦安市弁天 6-383
塚本 宏

1/15 ここに鳥がたくさんいた。特にオナガガモがいた。[illegible]がそばえきた。それでピントをあわせるのにくろうした。

[illegible]（武居 [illegible]）

1月17日(日) 谷津5丁目31-19 宮川次郎・郁子・彬久・[illegible] 石橋みよ子

千潟のこちら側には 今日はじめて来ました。
風は冷たいけど 天気がよく 気持ちの良い日です。
たくさんの人達がきて 鳥の観察をしていて にぎやかなところです。
皆とても楽しそうで いいですね また是非来ます。 もっと早くに……

何かをやってて、とやかく言うなら、まぁより。が、何もしないでいて言うのは、先が思いやられる。アバヨッ！

＜ご案内＞

希望者は 千葉の干潟を守る会 まで

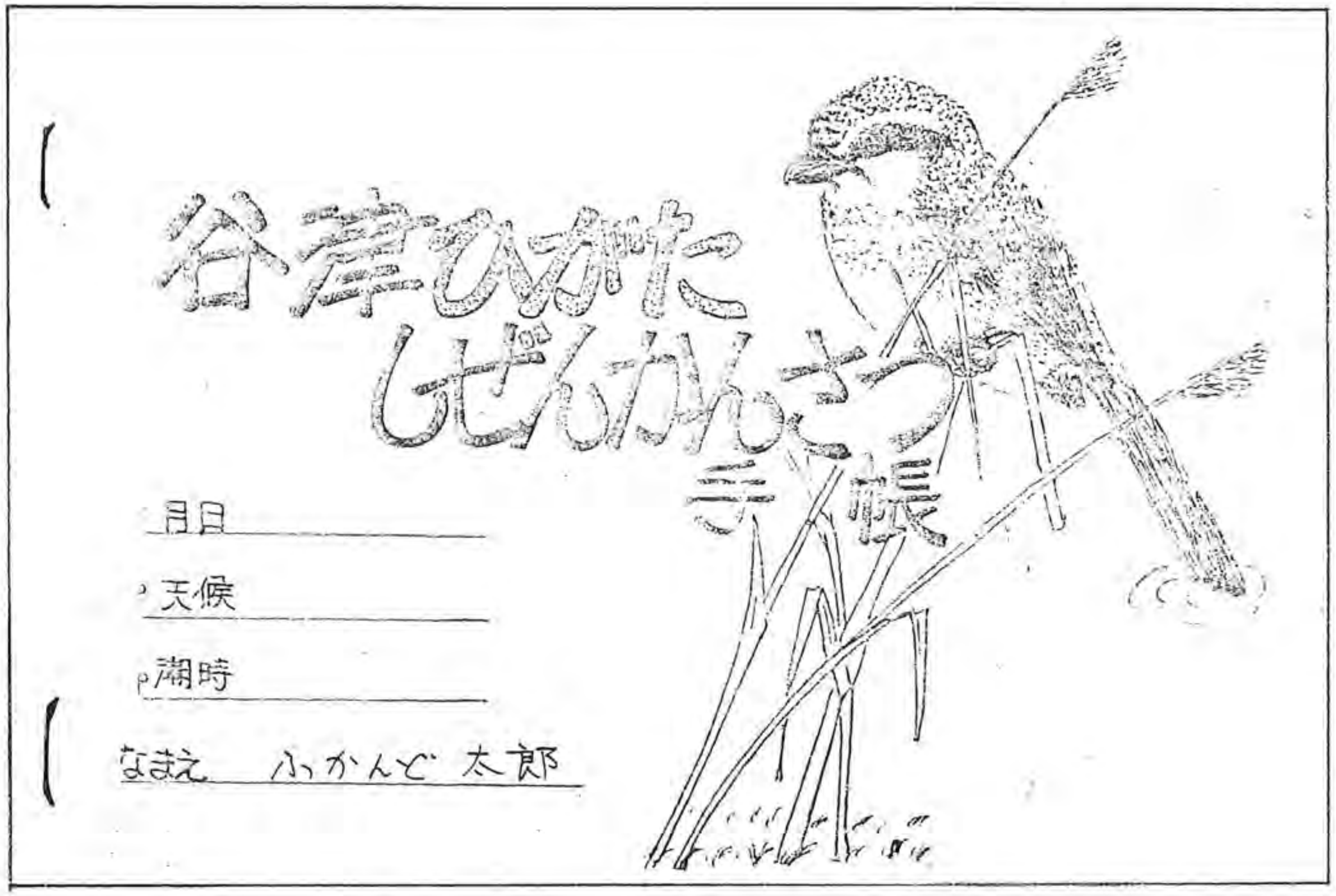
谷津干潟の「自然観察手帳」が出来ました。ご紹介します。"案内書"みたいなものです。

渡り鳥や植物のことなどがわかりやすく、親切に説明されております。是非ご利用して下さい。少しずつ覚えて下さい。

千葉の干潟を守る会は、県内は勿論、谷津干潟の保護運動を長年にわたって続けている、いわば、当会の"先輩格"にあたります。毎月第三日曜日に、谷津干潟自然観察会を行っております。この手帳は作ったばかり。これから更に内容を充実させていくそうです。

発行　千葉の干潟を守る会

代表　大浜清　〒275 習志野市津田沼 3-3-5
☎ 0474（73）3402

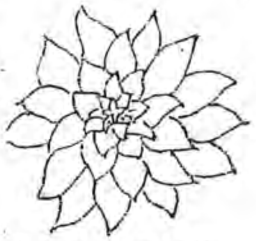


谷津ひがた
しぜんかんさつ
手帳

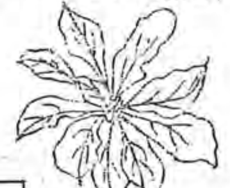
月日 ______
天候 ______
潮時 ______
なまえ　ふかんど太郎

（内容の一部）

草の冬越し

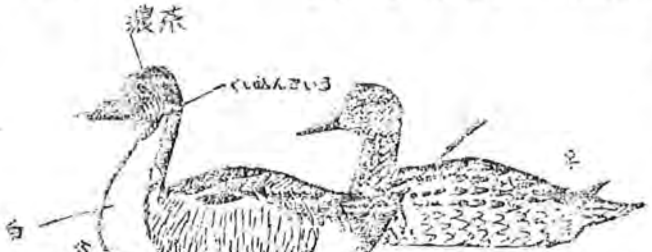


↑ アレチマツヨイグサ



ハルジョオン ↓
葉の裏面に毛が生えていて白っぽく見える。

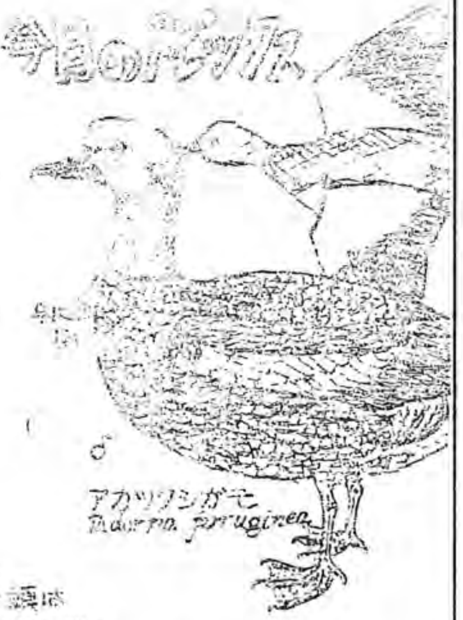
冬は、温度が低くなり日照時間も短くなります。谷津干潟の近くの草は、冬どうしているのでしょうか。葉を広げて地面にぴったりとつけているのをロゼット葉といいます。ロゼットで冬を越すのは、ノゲシ、ハルジョオン、アレチマツヨイグサ、セイヨウタンポポ、オオバコなどです。ススキ、ヨシなどは地下茎で、シロザ、エノコログサ、イヌビエなどは種子で冬をすごします。



オナガガモ　全長 ♂約75cm ♀約53cm

ここ近年 渡来数が 増えており、上野の不忍の池では、人の手から エサを食べます。英名を PINTAIL（ピンのような尾）といいます。

声 シィ シィ シーン、プルッ プルッ


今回のゲスト
白に近い
♂

アカツクシガモ
Tadorna ferruginea

体長約63.5cm
全体が赤褐色で頭は白っぽく、飛ぶと風切羽の黒さと、雨おおいの白が対照的でよく目立つ。
幕張埋立地に1羽 2年前に確認されたが去年（11月）、12羽が同じ埋立地で確認された。
今年の冬は幕張埋立地で過ごしそうです。
日本ではまれに冬鳥として記録されている

『谷津干潟ファン』のために・・・

ふかんど

第136号

1982.1.17

谷津干潟愛護研究会
〒272 市川市本北方二～三五～六
電話（〇四七三）ー三八ー六六六八

文責 森田三郎

会費年2000

創刊
1980.6.3

「谷津干潟友の会」

発足のお知らせ

会長　高橋新一

連絡先

〒275 習志野市秋津2-1-5-504
0474～53～8582
高橋新一方

〒275 習志野市秋津3～2～16～2
0474～51～7054
長塚進吉方

谷津干潟が好きな人、関心のある人、興味のある人ならば、どなたでも入会できます。

とくに、主婦や子供たちの為にというのが、「友の会」発足の主な目的です。たとえ、「谷津干潟の為に何かをやりたい・・・」という、その心はあっても、忙しくて何も出来ない、とか、あるいは、ヒマがないという人たちの為です。

「友の会」は、日曜日や休日に、必ず谷津干潟に参ります。そして、望遠鏡・図鑑・双眼鏡を用意して、説明をしたり質問に応じたいと思っております。その場所がすぐわかりやすくする為の目印として、「ノボリ旗」を立てるべく、現在作っているところです。

会費・・・当面はとりません。それについては、先々会員で決める。

会則・・・谷津干潟が好きな人。つまり、「ファン」であること。

〈目的〉

「友の会」は、地域に密着した谷津干潟にしたいのです。地域の人たちによって支えられた谷津干潟を切に願うものです。そして又、谷津干潟が、地域にしっかりと根ざし、愛される所になることをその理想とするものです。谷津干潟を、ひとつの〝広場〟としよう。地域の人たちの、あるいは遠方の、〝コミュニケーションの場〟にしょうではありませんか。谷津干潟のファンが、一人でも多くふえて欲しいのです。

自然とそこにすんでいる生き物と親しみ触れ合いと理解を深めるには、「実物教育」が他の何ものにもまさるものです。そして、谷津干潟こそ、きっとそれにふさわしい条件と地理を兼ね備えている所です。明日をになう子供たちにとっては、情操教育・理科教育、そして社会教育の場にもなります。

私たちが、全国に誇るに十分なこの谷津干潟。昨今言われる〝ふるさとづくり〟を、地域住民の日常生活にとけ込んだ、参加と協力を基盤としてこそ、よく成されるものと信じて止まないのです。

どっと渡り鳥を知りたい人がいましたら

野鳥のことを知りたい☞
千葉県の野鳥情報を知りたい☞
千葉県の野鳥保護に関心のある☞
野鳥の好きな人と友達になりたい☞
あなたに……

千葉県野鳥の会入会のおさそい

◇私たちの会では、毎月、会報（B５版、16頁位）を発行し、お送りしています。
◇月４～６回の探鳥会、自然観察会、室内例会などの行事、野鳥調査などを行なっており、どなたでも自由に参加できます。野鳥を見る楽しみを知ってください。
◇会報には、行事の記録や、会員からの“鳥だより”“読みもの”なども載っており、千葉県の野鳥の状況や、身近な鳥の知識などを知ることができます。
◇年１回発行する名簿は、近くの仲間との連絡に便利です。
◇本会は、もともと、自然保護運動を進めてきた鳥仲間が集まり、昭和４９年に誕生したものです。現在も、千葉県自然保護連合、千葉の干潟を守る会など緊密な連絡をとって、野鳥を中心とした自然保護運動に当っています。
◇会の財政は主として会費によっています。みなさんの参加が会の力になります。
◇会費の納入は、下の申込書と年会費2,000円を幹事さんにお渡しいただくか、同様事項を書いて郵便振替でお送り下さい。団体名の入会でもけっこうです。
◇本会は、会員の総意により運営されています。
＜あなたのご意見、ご希望を会に反映させましょう。＞

千葉県野鳥の会
会　長　石川　敏雄
事務局　〒281 千葉市幕張５－373
美島　俊仁方
TEL 0472－73－8297
郵便振替　東京５－175505
千葉県野鳥の会

谷津干潟探鳥会

期日　毎月第３日曜　　雨天中止
集合　若松団地バス停前　午前10時。
交通　国電船橋駅南口より、または京成線センター競馬場駅前より若松団地行バスに乗車、終点下車。（バス約１５分）
予定　１４時頃現地解散。
持物　弁当、水筒、防風具、（雨具）
参加費　１００円（高校生までは無料）
特徴　秋～春。シギ・チドリを中心とした水鳥の多さは全国で屈指の規模をほこる。４０ha の干潟に一面の鳥。

谷津干潟自然観察会には、渡り鳥について詳しい人が多数参加しております。来た人には誰でも、親切に、そしてていねいに説明してくれます。

外食レストラン「スカイラーク」のガラス窓

初めて入った。今年の正月、早々のことである。

ここは、私の生まれ、育った所である。幼少の頃に遊び、そしてかけ回った中でも、どっとよく親しんだ所なのだ。

その頃ここには、半分ブックレかけた、子供の目から見ても〝八方破れ〟の如き観のある自動車修理工場だった。工場といってと、コンクリートや鉄骨は殆んど目につかず、板の、それも古くてボロくで、あっちこっちではがれていたり大小の穴が、それこそ好き勝手にあった。入り口は14号線に面しており、線路側のほうは広い空地で、ほったらかしの、草が思う存分茂っていた。置くような物とて殆んどなく、使う必要のアテなんか全くないこの工場の空地こそ、子供の私にとっては、いわゆる「いい所」だった。チョウやバッタやカエル、ツクシやタンポポにとってもだ。端っこの田んぼとくっついている水辺には、菖蒲が群生していた。腹ばいになって、ジッとしている目の前で、おなかをピク〱させながらカマンチヨロが、気持よさそうに野イチゴの葉っぱの上で寝ているのであった———。

その頃のソコに、今、ガラス窓を見ながら座っている。向うを、腰の曲ったおばあさんが、リヤカーを引いていく。廃品回収で生活をして来たし、今もしている。おばあさんには子供が一人いた。女の子で、私と同級生だった。かわいがられて、わがまゝ一杯に育てられた。父親はいなかった。その頃から「くず屋さん」だった。時々、その子が親をバカにするのを、子供の私は聞いていた。27年以上をリヤカーを引いている———おばあさん。

ふかんど

オ137号

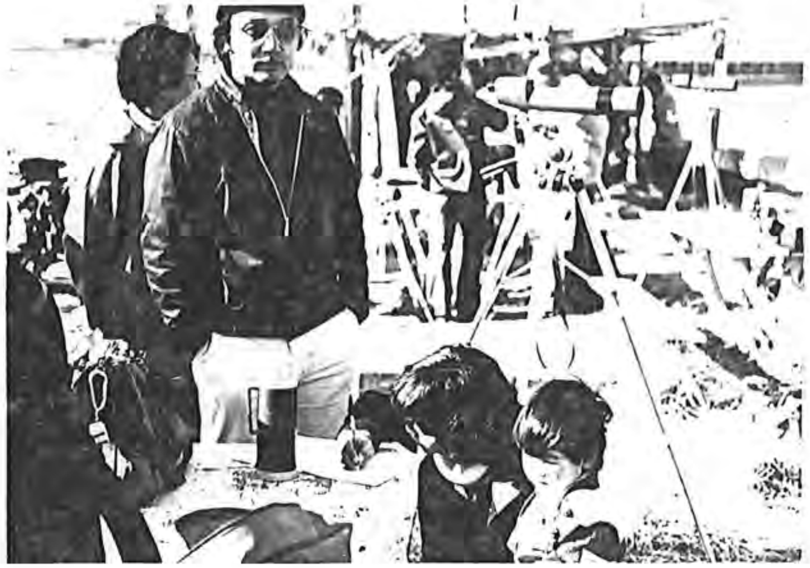
1982.1.20

谷津干潟愛護研究会
〒272 市川市本北方二ノ三九ノ六
電話(〇四七三)一三八一六六六八
文責 森田三郎

会費年2000

創刊 1980.6.3

子供連れの主婦とご主人が、今、谷津干潟通信のノートに何かを書いています。日曜日など、こういう人達が多いんですよ。



晴れた冬の日の干潟にて

1月17日(日)。天気はスカッとして、とてもよかったが、風がつめたかった。この日より寒波が来た。

オ45回クリーン作戦が行なわれた。ゴミを拾うよりも、もっぱら干潟の環境改善作業、つまり、スコップで砂を入れるのは終始した。シャツ一枚でも、少しやれば汗ばんで来る。他の会員は埋め立て地へ、渡り鳥の調査に行っている。観察会の人、「クリーン作戦」手伝います、なんて言ってても、終ればパッと帰っちまって、ただの一人もいない。見事。

谷津干潟通信箱 〜みんなの声〜

1/19 3:00

仕事の関係で秋津の総合福祉会館にきましたので久しぶりに10分だけ鳥たちとおしゃべりして帰ります。いつもファンドをよませてもらってます。その中 会を運行す 今月はものすごーく 忙しく 又気持ちもおだやかでないので ゆっくりと鳥たちの姿をみた事のエネルギーの源になった気がします。ナーちゃんの感想文の本も読ましたし 借りれ写真もおかえししたいので、2月になったら ゆっくりきたいと思います
仕事は、だれの為にするのではなく、自分自身を向上させる為にするべきだといつも言い聞かせています。森田さんも 自分自身の生きざまを向いつつ 現在の行動をとっているのでしょう。その結果が、鳥にすこしだけ、心ある人達からも応援されているのだと思って がんばって下さい。

市川 M.Y

励ましのお言葉、本当にありがとうございます。

振り返ってみるに、何のかんのといったって、その時々に、いろんな形で応援してくれる方々がいたればこそ、ツッパッたりガンバッたりすることが出来たのです。

そして又、その時はひとりだったと、そう思っていた時でも、私の知らないところで、けっこう見ている人、知ってる人はいたんですねえ。これで又、ガンバル資本が出来ました。

この日、ちょうど観察会がありました。手前の白い袋は、クリーン作戦のゴミです。

船橋御団地「いそしぎ」のガラス窓

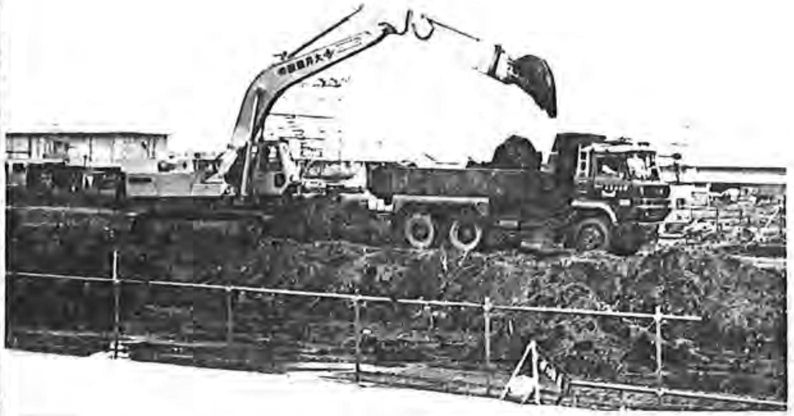
ため息まじりにーーー

まろやかにしてハイブレンドなるコーヒーを飲みつつ、左の写真の如き光景を見るととなく見つめているのでした。ガボッとすくって、ドサッと砂を入れる、ホレボレするようなその力強さーーー。四回で、ダンプ一台分。それ次々とやってゆく。

今、谷津干潟のまわりには、こんな所がいっぱいある。毎日見ている。

私の車は軽自動。トレーラー、ダンプカー、タンクローリーなどが走る中を、チョロ〳〵動きまわっている。

「あぁーあーーー、オレ達にゃぁ、あのダンプカー一台分の力もねえんだなあ。あの道路の柱、一本どれくらいかかるのかなぁ。あの飯場のプレハブ、使っちまったら、こっちにくんねえかなぁ。あの工事の看板や、立ち入り禁止のヤツ、あんくらい立派なもん、どうして行政は干潟のまわりに立ててくんねえんだろうか。あれっ、あんないい砂、あんな所にブチまけとくんなら、オレ達にくれて、干潟の生き物の為に使わしてくれればいいのにぃ、ったくまぁー。なんだぁあのパワーショベル、年がら年中使ってねえじゃねえかぁ、んなら、ちょっと干潟の自然緑地に来てえ、チョコ〳〵ってえ池でも作ってくれんばいいのにぃ、10分とかけないで出来るんだからーーー、ちょっと、ちょっとでいいのになーーー」。なんて、まだまだこんなヒモジイ、アサマシクかつ、ミジメなことを思いつつ見ているのです。そして、又今日も。こうして、ウシロにしてウスボンヤリと。ハシタナイ会長さんです。でも、きっと、この「いそしぎ」の店の人は、ぼくが、高尚かつ深淵な、自然保護思想の哲学的な考えにふけっていると、思っているかも知れない。



船取線ー第2湾岸道路。52年1月12日写す。船橋御団地ヨリ、谷津干潟方面へ。現在工事中である。3月末開通。

自然緑地に不法投キ物。蹄鉄がたくさんあるところをみると、競馬場の人なのでしょう。野鳥だけでなく、これを見て欲しい。

第46回 谷津干潟クリーン作戦

ふかんど
第138号
1982.1.22
谷津干潟愛護研究会
〒272 市川市本北方二〜三五〜六
電話〇四七三—三八—六六六八
文責 森田三郎
会費年2000
創刊 1980.6.3

鳥に、パンのミミをやっています。お母さんと子供のいる所は、私たちの手作りの干潟です。人が去ると鳥が来ます。

静かなる
陽ざしを浴びて
母と子の
映る水面（みなも）に
鳥よ来いよと

「ほらぁ、坊や、鳥さんにパンあげようね、ポーンと投げるんだよ、ポーンと」。子供は、そのモミジのような小さな手を差し出しました。片手には、流れて来たのでしょか、いつの間にか拾った竹の棒を持っていました。遠くにカモとカモメの群が、静かに、ノンビリと浮んでいました。

子供は、お母さんから、少しでもいっぱいのパンのミミを、持てるだけもらいました。ちょっとでもあっちのほうにやろうと思って、とってもいっしょけんめに、そーしてとってもへたくそに、〃ヨォーイショッ〃と投げました。

一月十九日、快晴。お母さんと二才の子供と森田。三人のクリーン作戦。

さっき投げたパンに、ユリカモメとアオサギが。満ち潮で、干潟が沈みゆく。

「へえー、こんな所にいこんなもんがあるんだねえ、静かだねえ鳥がいっぱいいるねぇ」と、大工さん。

お振込は千葉銀行012—54253
谷津干潟愛護研究会

ヨットハーバーを作ろうなんて言うと、自然保護関係者には目の敵にする人も多数いるが、心がせまい気がしている。

谷津干潟愛護研究会事務所
7-7

事務所をつくりました

とは言っても、森田が住む所なんですよ。
そこにただ、上の写真のような看板をつけただけ。引越しは完了したのですが、また電話がありません。入ったら、みなさんにご連絡いたします。

果せなかったもの・・・

あしたの海

変わる東京湾の港図

<13>

1982.1.20 ヨミウり

難しい漁業と調和

艇庫ないハーバー

ヨットの海

〝オニっ子〟認知はいつ？

いなげの浜の沖合、千葉航路と船橋航路にはさまれた千葉第五区と呼ばれる三角形の海域は、千葉港内でも最も船の航行が少ない。いなげ海浜公園の一部として草野水路の水門わきにヨットハーバーを設け、この海域を〝ヨットのメッカ〟にという計画が作られたのは、稲毛、幕張地区の埋め立てが始まる四十年代前半。

五十年、千葉市の手で、約二万五千平方㍍にのぼる入り江の護岸やスロープが完成。昨年六月からは、展望台を備えた一部四階建てのクラブハウス（管理棟）の建設も始まり、外見上は立派なヨットハーバーの体裁が整えられている。ところが、肝心の艇庫などの建設はまだで、もちろん、保留されているヨットもない。護岸の堤防は釣り人でにぎわっているのだが。

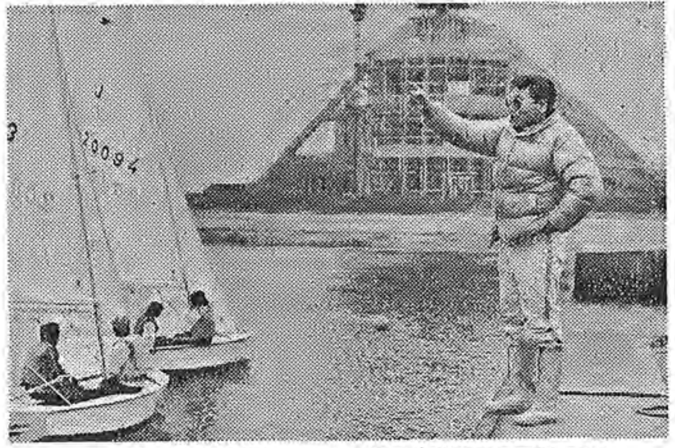
五十五年の栃の葉国体のヨット競技は、海のない栃木県の要請で、この海で行われた。行政当局が描いた〝ヨットの海〟が実現した形だが、市では、「ヨットハーバー」と呼ぶことすら、ためらいを見せる。認知されない〝オニっ子〟の感じだ。

というのも、この海域は、内湾漁民の漁場の一つであり、多い時には五十隻近い漁船が操業する。このため、漁民たちは「ヨットに自由に帆走されたのでは操業できない」と、ヨットへの開放に難色を示しており、市の調査作業も暗礁に乗り上げているためだ。

といって、開放を全面的に拒否しているわけではない。栃の葉国体の場合もそうだったし、ヨットハーバーのすぐ近くにある県立磯辺高校ヨット部の練習は、漁民側の同意を得て行われている。そのかいあって、同国体では、女子スナイプ級で見事、磯辺高が初優勝。「千葉に磯辺あり」と全国にその名をとどろかせた。

同校ヨット部は、五十三年四月の開校と同時に創部された。

「海に近い学校ですからね。なにか海洋スポーツを、という広川善任校長の意向もあって創部したんですが、ここまでやってくれるとは」。厳しい指導で知られる監督の国府田由隆教諭(三六)は、全国でハイレベルの実力を持つまで成長した部員に目を細める。



〝ヨットハーバー〟の堤防でヨット部員を指導する国府田さん

創部当初は、ヨットもない状態。千葉大や地元のヨットクラブから古いヨットを借りての練習。一日で板がふやけ、修理塗装に一週間も費やしたことも。それこそ、艇をだましだましながらのハード練習だった。「それだからこそ、なんとか、もっと自由に練習させてやりたい」と国府田さんは言う。

練習が認められているとはいっても、「今日は、沖には出ないでくれ」と言われることもある。その時は、狭い入り江の中だけで練習せざるを得ない。それに、「なによりも、ここがヨットハーバーと認められて、大学などのヨットマンがもっと集まれば、お互いの技術ももっと向上できる」と国府田さん。また、艇庫がないために、近いといっても、一㌔離れた学校から、帆など一式をリヤカーに積み、ヨット本体を台車に載せてガラガラ引っ張って行かなければならない。

海のレジャーやスポーツと漁業がうまく調和できるとき、本当に開かれた海に。その日が来るのも遠くはないはずだ。

私の家に、もう少し金が有ったら、ボーイスカウトや海洋少年団みたいなものに入っていただろう。海というよりも、水が好きだったのである。「かあちゃん、オレ、漁師になりてえーーーし」、そう言っていた時がある。もう30年近くも前のことである。干潟の沖の浅瀬で、青みどり色の海にまっ白い波をけたてて、ポン〱船が走ってゆく。カジ棒を持った漁師が、つっ立って沖の方を見つめていた。それを見てだった。

しかし、手の届かぬことより、丸太を浮べたり、手製の船を作って遊んでいた。ヨシの葉の船や貝ガラを船にしたててもいた。浮ぶこと、遊べることが好きだったのだ。京葉港造成中にも、ヨットの人に頼んでのせてもらってもいた。時々ひっくり返っていたがーー。

千葉港は海岸線が約130Kmとある。特に青少年の為に、海に触れるものとして、ヨットハーバーの三つ位是非作らねばならないと思う。

〝ヨットなんてレジャーだ……〟なんて言う谷津干潟の鳥を見に来る人。殆んど全部がレジャーの域の内さ。

ふかんど

第139号

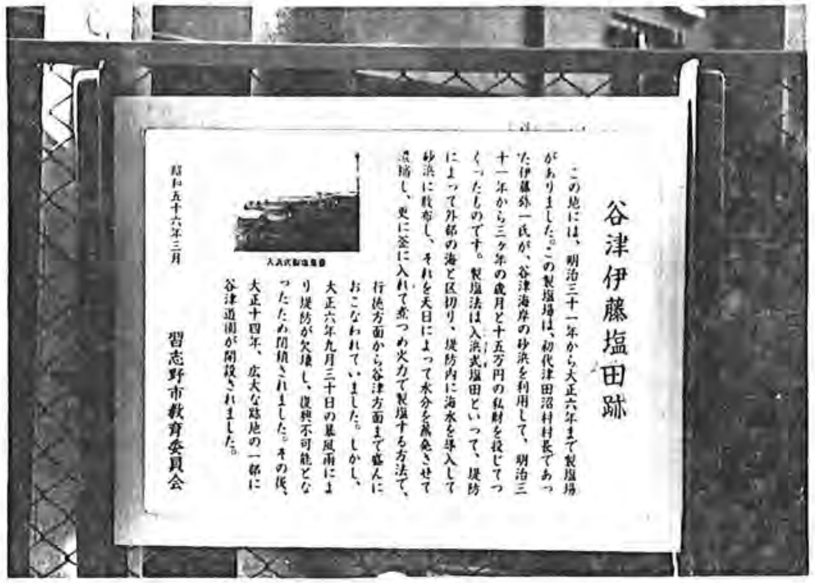
1982.1.23

谷津干潟愛護研究会
〒272 市川市本北方二～三五～六
電話〇四七三―三八―六六六八
文責、森田三郎

会費年2000

創刊
1980.6.3

「ふかんど」時代をたずねて



谷津伊藤塩田跡

この地には、明治三十一年から大正六年まで製塩場がありました。この製塩場は、初代津田沼村村長であった伊藤弥一氏が、谷津海岸の砂浜を利用して、明治三十一年から三ヶ年の歳月と十五万円の私財を投じてつくったものです。製塩法は入浜式塩田といって、堤防によって外部の海と区切り、堤防内に海水を導入して砂浜に散布し、それを天日によって水分を蒸発させて濃縮し、更に釜に入れて煮つめ火力で製塩する方法で、行徳方面から谷津方面まで盛んにおこなわれていました。しかし、大正六年九月三十日の暴風雨により堤防が欠壊し、復興不可能となったため閉鎖されました。その後、大正十四年、広大な跡地の一部に谷津遊園が開設されました。

昭和五十六年三月

習志野市教育委員会

谷津庭園の正門のまえ

今の「ララポート」や船橋競馬場の所は、私が小さかった頃、干潟が4kmくらい出ました。この辺は又、東京湾でもいちばん奥の位置にあります。

きっと、塩田を作るには、地理的によかったのでしょう。そう言えば、それらしき古い堤防があったのを記憶している。花輪インターから来た道路が湾岸道路とぶつかる所の線、干潟わきの所。そしてその信号から若松団地入り口の交差点にかけての道路の所に、「字形の、ノコギリの刃のようになっていた「ブックレ堤防」がありました。

谷津干潟通信箱 ～みんなの声～

水鳥の　声さえ渡る
　この干潟
白き氷は　まだらえがきて

1/21

私は時々この辺に散歩に来ます。愛犬のシーザーといっしょにです。おだやかな日ざしと、心地よい海の風に吹かれて鳥たちをながめさせてもらってます。コンクリートの道路にコンクリートの建物、どこへいってもコンクリートだらけの中で、ここは本当にほっと息のつける、人間らしくなれるところです。砂地に草原、そして白いそぼくなベンチ。
いろいろなかん板には、鳥の説明や、みんなでこの干潟を守りましょうと書かれている。たぶん奉仕作業なのだろうな…どなたがなさっているのかなあと思いつつ私なんか何にも出来ずにただその恩恵を受けるだけ。申し訳ないなあ…と思っておりました。ところがある日、お一人で黙々と作業をなさっている方を見つけました。鳥のため、自然のため、しいては子供のため、人々のためと時間を見つけては、ここの環境づくりに一生けんめいな方。ほんとうに、ただただ頭の下る思いです。どうもありがとうございます。

1/22

二人とも、名前が記してありませんでした。

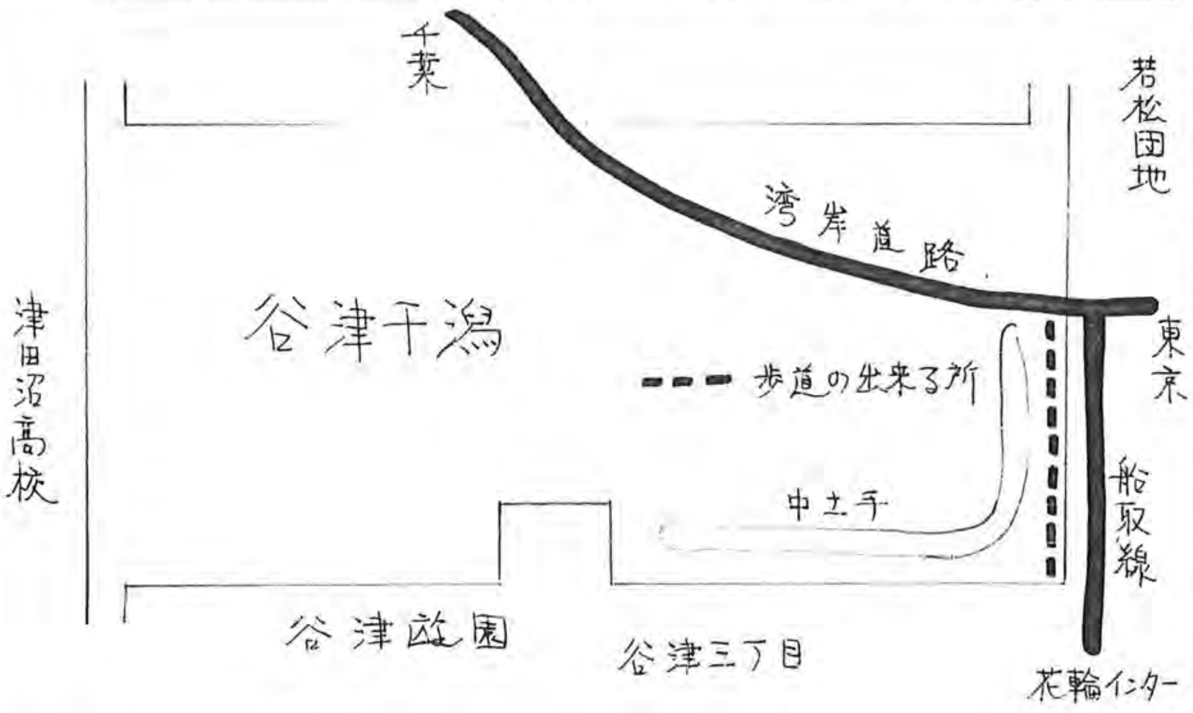
大事にして下さい

谷津干潟通信箱は、一つの「バロメーター」かも知れません。その使われ方、抜われ方においてです。干潟のまわり、三ケ所に設置されています。これが作られてから、とう七年になりました。いろんなイタズラや破カイ、何十回とありました。何十回と気落ちしたり、淋しくなったり、そして腹を立ちましたが…。

お振込は千葉銀行012―54253
谷津干潟愛護研究会

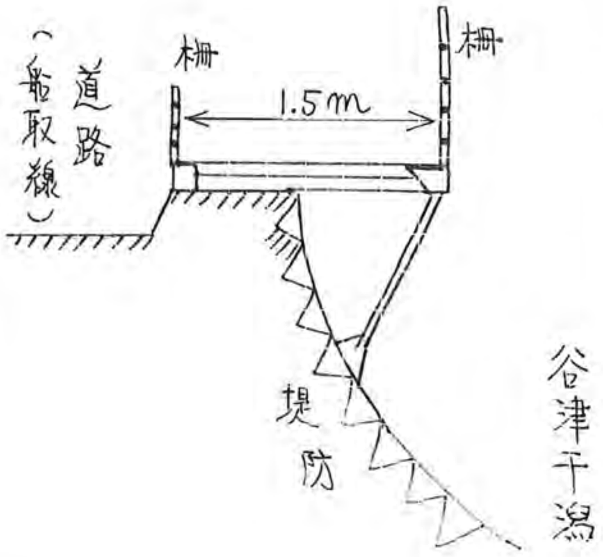
《お知らせ二つ》

簡易歩道が出来ます　完成五月の終り


千葉
若松団地
湾岸道路
谷津干潟
津田沼高校
東京
歩道の出来る所
中土手
船取線
谷津遊園
谷津三丁目
花輪インター

従来、ここは歩行者や自転車の人にとってとても危険な所でした。

今までに愛護会は、日本道路公団に一度、県企業庁に二度にわたって、道路計画と無関係に作ってくれるよう要望してきました。住民の方も当会に相談に来た。


道路
（船取線）
柵
1.5m
柵
堤防
谷津干潟

遮音堤が出来ます

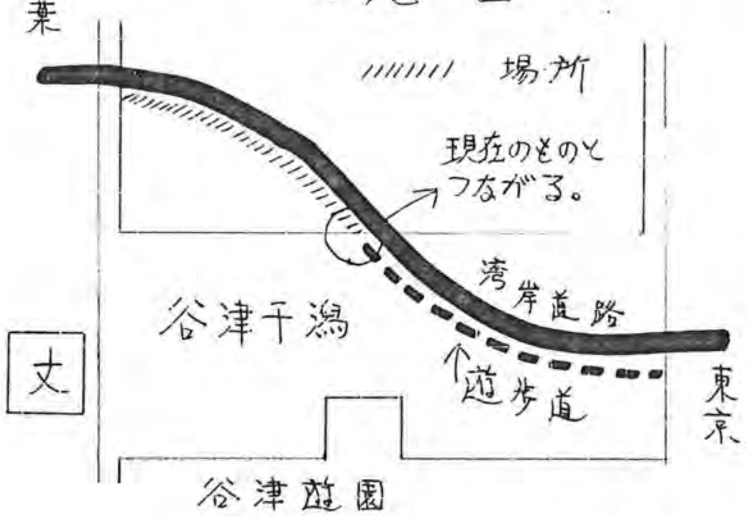
昨年十二月九日、PM五時に話し合いがありました。相手は、建設省から細谷悦雄建設監督官、日本道路公団から、原弘工事長、そして森田です。伊藤建設の現場責任者は、大倉義博氏です。こちらの希望として、

・木を高いもの、多く植える事。

・歩道と自然緑地の間に、サクないし、金アミのようなものを作る事。

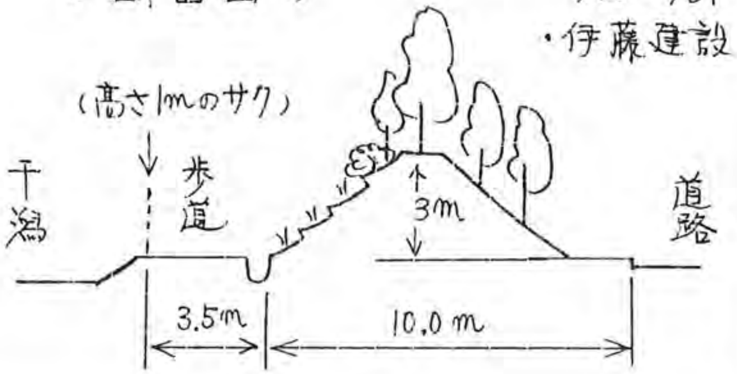
以上です。

（地　図）


千葉
場所
現在のものとつながる。
湾岸道路
谷津干潟
文
遊歩道
東京
谷津遊園

（断面図）

・期間
12/12〜3/31
・伊藤建設


（高さ1mのサク）
干潟
歩道
3m
道路
3.5m
10.0m

∴ 質問は森田までして下さい。

ふかんど
第140号
1982.1.24
谷津干潟愛護研究会
〒272 市川市本北方二～三五～六
電話〇四七三―三六―六六六八
文責 森田三郎
会費年2000
創刊 1980.6.3

「自由に使って下さい」が21人

一月二十四日(日)

ご自由にお使い下さい。
谷津干潟友の会

紙に、そう書いてテーブルに貼りました。次にプロミナーをテーブルの上に置き、いちばん鳥が集っている所が見えるように、セットしておきました。そして、そのそばに、ノートとペン。あとは、これらモノ言わぬ道具に働いてもらった。

右が、「谷津干潟友の会」の仕事始めです。すぐに私は別の所に行って、干潟の清掃、看板作り、ベンチの修理と製作、干潟に投げられた一輪車の引き上げ、干潟の改善作業にとりかかりました。

プロミナーを使った人が21人というのは、時々、作業の合間に数えたものです。だから、本当はもっといたと思います。

プロミナーの所へは、夕方まで一度も説明に来なかった。文字通り、ホッタラカシにしておいた。他の会員の人は、皆都合わるくて私一人でした。

この日の、〝作業配当〟とその内訳を、次の如く決めました。

・ベンチの製作(三つ)と砂入れ ↓ 谷津干潟愛護研究会
・看板作り ↓ 谷津干潟ボランティアグループ
・干潟のそうじ ↓ 美化委員会

そして、その他と一輪車の引き上げは、プラスα（アルファ）、以上としました。つまり、「一人四役」です。

怒らないで下さい、「こんなこと位やって---」と。その気持にも〝一理〟有ります。が、過去八年間、一日に、少しずつ、「こんなこと位」の、連メンとした積み重ねだったのです。実に、行動が、私を支えて来ました。

読者のこえ

森田様

会報「ふかんど」お送り頂きまして、どうもありがとうございます。

何よりも、訴えずにはいられない！という、森田さんの、物凄い、エネルギー、勢気、熱情というものが、伝わってくる雑誌です。

近頃、こんなに、圧倒された雑誌が、あっただろうか？と感じ思いました。

恐縮の至りです。本当です。何故かと言うと、こうまで感心してもらうと、もし今度会った時、どうやって顔の筋肉を調整して振るまったらいいのかと、そう考えてしまうからです。でも、うれしい。

中村統治氏からです。1/19

谷津干潟通信箱 〜みんなの声〜

1982年1月24日(日)　向後
オナガガモが多いようです。
次に遠すぎてそうがんきょうではよく見えなかったカッシラサギらしきものがいました。
回りにはミユビシギもすこしいました
あと水を飲みにきたホオジロ、ムクドリなどもいました。
また春に来ようと思っています。

前田建設と竹中土木に一升ビン（剣菱）二本（一級酒）

— 谷津干潟クリーン作戦に協力して頂いた御礼として —

ご安心下さい。森田個人のお金でです。会費でなんかやったら、皆さんに〝敵視〟されかねませんでしょう。かつて、大蔵省、県企業庁、京成と谷津遊園、習志野市、ゴミを捨てていた住民など、これら相手にやり合っていました。その時すでに、私達のクリーン作戦に、前田建設と竹中土木が社員と重機類をまわしてくれて、黙々と協力していました。

それが、どれ程心強く、かつ助かったことだろうか！。それがきっかけとなって、国、県、市が動いたのです。これは谷津三丁目前の事で、主婦中心なのでした。「ああいう建設業者に協力してもらうなんて――」と、他の自然保護団体は言いました。

全国広しと言えども、建設会社に一升ビンをブラ下げて行くのは、私一人ぐらいだろう。

「友の会」が今後すること

必ず、誰かが行ってます

まず、この一事です。これをやり続けます。毎週日曜日・休日には、干潟に行って、そこで説明や案内、観察やその指導にあたります。最低一人いればいい。

プロミナー・双眼鏡、図鑑などを用意して、「皆さまのお役に立ちたい」と、〝任務〟にあたるのです。渡り鳥やカニ、魚だけではありません。干潟に関する、多くのいろんなことを説明いたします。

そうすれば、やがて、干潟のまわりに住んでる人達は、「あすこに行けば、いつも誰かがいて、いろんなことを教えてもらえるよ。そして、道具もそろっていて使えるんだ――」、ということが、いわゆる知られて定着して来ます。そこまでもって行き、そのようにすることが目的なのです。とにかく、根気がいるのに違いありません。

友の会を作ったから、改めてこうしようというのではありません。三年程前より、ときどと私達は毎日曜と休日には、干潟に行っていろんなことをやって来ました。その経験が私達には十分有るのです。とにかく、最近はたくさんの人が干潟に来ます。月に一度だけの、それと二時間足らずしか干潟にいないようでは、昨今の現状、つまり地域の方々に対応出来なくなっていることは、誰にも明らかだったのです。